Se 376. N24 1 78 1

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

お茶の水女子大学図書
昭和55
131622

1

お茶の水女子大学
昭和
53.12.12
受贈
附属図書館

第七十八巻　第一号　日本幼稚園協会

明日の保育の地平を拓く
現代に生きる保育者に——

フレーベル新書

B6変型判

最新刊

新書21

子ども動物園

遠藤悟郎著　192頁　650円

上野動物園の子ども動物園長が語る、小動物飼育のコツや動物園での新しい楽しみ方。「パンダのおなら」「ネコの仲間ライオン」など愉快な動物園裏話も豊富です。

新書22

魚のせかい

魚の不思議・飼育ノート

杉浦　宏著　144頁　600円

上野水族館で活躍中の著者が語る、オスが赤ん坊を産む魚や人工貝ベビーの誕生など珍しい魚の子育て物語。水辺の動物飼育のコツも沢山のイラストでやさしく紹介しています。

新書23

たのしい昆虫教室

矢島　稔著　152頁　600円

昆虫のなかで人気ナンバーワンのアリをはじめ、ごく身近にみられる昆虫たちの不思議なたのしい、そしてきびしい生き方をやさしく紹介しています。

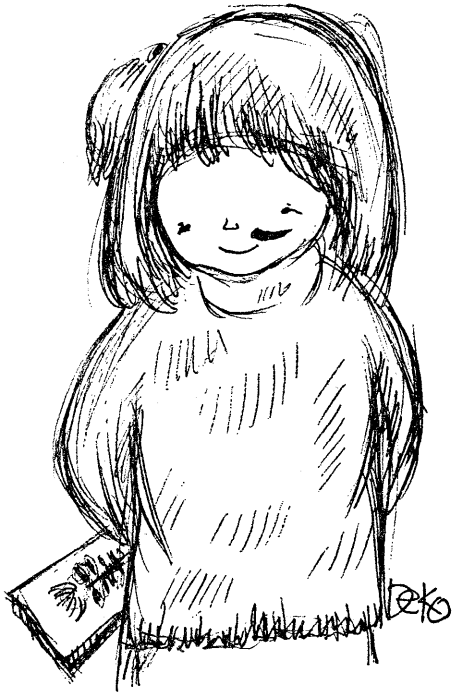
「子ども動物園」本文より

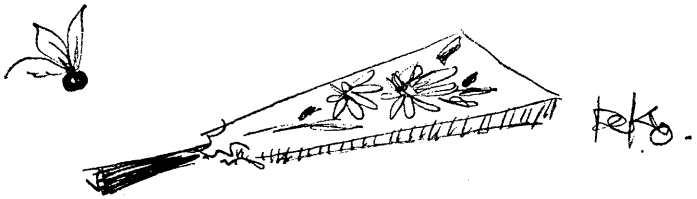
くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課（03）292-7781㈹にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育

第七十八巻　第一号





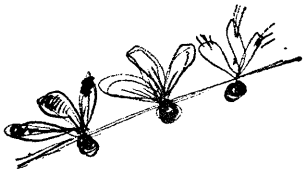
幼児の教育　目次

——第七十八巻　一月号——

表紙　油野誠一
カット　中島英子

© 1979
日本幼稚園協会

宗教と科学……千谷　七郎…(4)
子どもの見る力
——梶山彩色壁画古墳発見をめぐって——……森　浩一…(8)
運動教育雑感……松本千代栄…(16)
『復刻・幼児の教育』……(22)
私の保育……宇多　昭子…(24)
ルソーの夢
——むすんでひらいて考——（その五）……海老沢　敏…(31)



大人になってゆく子ども
成長発達のリズムと教育（上）……伊藤　隆二…（37）

クリちゃんの動物園散歩（三）……根本　進…（43）

★倉橋賞受賞論文
幼児における空間的な量を表わす言語の発達（その三）
――「大きい」という語の使用とかさの判断との関連――
……森　一夫・他…（46）

保育の体験と思索
――子どもの世界の探究――（二十二）……津守　真…（53）

宗教と科学

千谷七郎

「宗教と科学」というようなテーマを揚げると、何を今更と思う人々も大勢いることだろうし、それと反対に、宗教とまでは言わなくとも、何か宗教的なもの、或いは宗教心こそ科学の時代に必要とするのではないかと、日頃から思っている人も少なくはないであろう。事実、私自身或る雑誌社の企画になった同じテーマの座談会参加の案内を受けた折にも、この二つの感情が入り雑った。

コペルニクス（一四七三―一五四三）によって再確認された地動説に対するガリレオ（一五六四―一六〇〇）の保証はカトリック教会から撤回を強制された。その少し前には、イタリアの哲学者ブルーノー（一五四八―一六〇〇）も新しい自然観を唱えたが、それは瀆神の罪を犯すものということで、異端者として宗教裁判にかけられて焚刑に処せられるという悲劇もあった。それらは宗教改革の時代のカトリック教学護持の厳粛主義と、近代的な自由討究の学風との間に起った悲劇であるけれども、近代科学の力ある発展はかかる矛盾を剋服してとげられた、と言われて来た。そして、ダーウィンの『種の起源』（一八五九年）はほゞの百年ばかり前のことであったが、その生存競争、適者生存による生物進化論は特に宗教家から激しい非難をうけ、神の創造による人間の神聖を冒瀆するという見地から排斥されたけれども、それらの人々は却って旧思想の人とされる状況で、謂わば宗教に対する科学の勝利といったものが謳歌されているかのようであった。そして自然征服といった言葉も私どもに何らの疑問を抱かせなかった。今から半世紀前の私どもの小学校で学んだ「宗教と科学」との関係はその程度の知識ではなかったかと

思う。

そこで、「宗教と科学」というようなテーマになると、何を今更、という感情が最初に出て来て戸惑いを感じさせるのだろうが、併し、今日になって見れば、例えば「自然征服」などという言葉を臆面もなく公言する人はいつの間にかいなくなっていることに気がついてみると、人間の感じ方が大きく変化して来ていることが思われるのではなかろうか。ヒマラヤ征服といったような呆けた言葉がまだ聞かれないでもないが、それは自然征服思想時代の残余であろう。既に一九七二年は世界自然保護の年でもあった。人々はやっと科学の限界、それに危険性をも知って来た。そういう人々の意向の大きな変化を背景にして、宗教と科学の問題が再び少しずつ意味をもつようになって来ているのではなかろうか。ルネッサンスから始まった教会と科学との矛盾も、もっと深い観点からの再検討を待つものではなかろうかとすら思われる。

例えば、現代人の特色とする「進歩」思想に大きな影響を与えたと言われるダーウィンの進化論についても、教会的見地とは全く別箇に批判されて久しいけれども、それに注目している人は少ない。「自然界には『生存競争(struggle for existence 註・正確に訳せば自己保存のための戦いであろう。for lifeではないから)』などは全くない。ただ生命を守ることに由来する戦いがあるだけである。多くの昆虫は交尾の過程が終わると死んで行くのを見ても分る通り、自然は自己保存に重きを置いていない。ただ生命の波が類似の形態を繰り返し展開して行くだけである。一匹の動物が他の動物を追っかけて殺すのは空腹からの必要がそうさせているのであって、利欲や野心、権勢欲からしているのでない。ここに、どんな進化論も橋渡しできない深淵に出会うことになる。種は決して他種によって絶滅させられることはない。何故なら、一方が過剰になれば必ず餌物が甚だ乏しくなることによって食料が失われるという報いが来るからである。種の交替変移は巨大な時の間に地球的な諸理由から行われたのであって、亜種の不断の増加をもたらした。わずかの人間世代の間に見られた幾百もの種の滅亡は、たとえば恐竜やマンモスなどの絶滅とは到底比べられるものではない」(L・クラーゲス『人間と大地』一九一三年)。ダーウィンが自分でも気がつかないで奉じている形而上学はルネッサンス以来殆ど独裁的となっていた「合理主義」であって、これは世界推移を推進させる諸勢力は、外ならぬ或る隠れた功利主義者の意識からか、さもなければそれと全く同じ態度をとる「自然」から導き出

せると考えていたことであった。ダーウィンの動物に寄せる温い思いやり、秀れた観察力、慎重さ、徹底性、たゆむことのない熱心さと調和している共感的人格を以てしても、時代精神の支配を免れることの困難な好箇の一例であろう。ダーウィンの広大な業跡も同時に殆ど前世紀後半を含むほどの時代全体の視野狭窄を来たすことに決定的な寄与をしている。そもそも科学とはそういうものなのだろうか。

ところで、ゲーテは一つの覚書きのようなものを残している。「宗教と文芸と学術とは、崇める、創造する、観得するという三つの人間の欲求を充たすものである。この三つは途中ではいつも離れ離れになっているけれども、初めと終りとでは一つものである」と書き、更にそれをしぼって次の詩句にまとめている。

学術と文芸をもつ者は、宗教ももつ。
二つをもっていない人でも、宗教はもつだろう。

右の覚書きと詩句で知られることは、人間を人間らしくする根本は宗教であること、そしてその宗教というのは、ゲーテにあっては崇める心(anbeten)、畏敬心(Ehrfurcht)、敬虔(fromm sein)という言葉で述べられている。『ウィルヘルムマイスターの遍歴時代』の中で三人衆に語らせている。「どんな宗教でも、恐怖から発したものは私たちの間では認められていません。……恐怖心を抱くことは容易ですが苦しく、畏敬の念を抱くことは困難ですが快いことです。人間はなかなか畏敬する決心をしたがりません、いや、むしろ決して決心しないといったほうがいいかもしれません。しかし畏敬は一つのより高尚な心ばえであって、人間の天性に加えられなければならぬものであり、……ここにあらゆる真正な宗教の尊厳があります」と。

この畏敬について、吾が本居宣長は「凡て迦微(カミ)とは、古(イニシヘ)御典等(ノミフミドモ)にも見えたる天地の諸(モロモロ)の神たちを始めて、其(ソ)を祀れる社に坐ス御霊(ミタマ)をも申し、又人はさらにも云ハず、鳥獣(トリケモノ)木草(ソノホカナニ)のたぐい海山など、其餘何にまれ、尋常(ヨノツネ)ならずすぐれたる徳(コト)ありて、可畏(カシコ)キ物を迦微(カミ)とは云なり。……」(古事記伝三六巻、小林秀雄『本居宣長』四五二頁)と述べている。一見すれば、謂わゆる民族宗教を述べているようであるけれども、このカミを、ヘラクレイトスの「万物は生きる」という意味での「生」に置き換えて「生に寄せる畏敬、或いは敬虔」とするならば、最も厳粛な普遍的宗教心とすることができるであろう。但し、このような敬虔は、特に現代にあっては「一つのより高尚な心ばえであって、人間の天性に加えられなけ

ればならぬもので」あろう。

さて、このような宗教心から遊離する科学の危険をゲーテは危惧し、憂慮していたことが明らかに知れるのであるが、それは既にルネッサンスにおける教会と科学との矛盾として露出していた。それは双方に不備を蔵していたことに由来するのであるが、このことはルネッサンの時代が宗教改革の時代と一致すること、そして科学は現実全体の聯関、脈絡の観得から離れて、質と量の分裂をもたらし始めていたことから容易に見られるところである。「ちなみにエネルギー（力）保存の法則といったような物理学の量法則を生命の問題に適用するなどということは全く精神から見放されたものである。今だにレトルト（蒸留器）からどんな生命細胞も造られはしない。もしそれが成し遂げられるとしたら、それは『力』の結合からではなくて、化学物質もまた既に生命とは不断の自己更新の性能をもつ形態である。もし種を絶滅して、この形態を抹消してしまえば、たといエネルギーはいうが如く保存されても、地上には永遠にその種を見ることはない」（L・クラーゲス）。

後にカントが諸科学の価値は、それらがどれほど数学を含んでいるかということで決められる、と述べた新たな自然科学はルネッサンスから始まって、ニュートン（一六四三―一七二七）を経て今日に至ったのであるが、今はこれを詳しく辿る余白がない。ただ人間の「自然征服」というような旧約聖書（創世記一・二六）以来の伝統と言われる形而上学的所信も既に勢力を失墜して、むしろ人々は戸惑いを感じている今日でもあるので、もう一度私ども人間自身を省察する枝折りにもと、吾が元禄俳人宝井其角が元禄十六年の墓参の帰途泉岳寺に立ち寄って、俳諧の弟子子葉（大高源吾）、春帆（富森助衛門）、竹平（神崎与五郎）を含む赤穂義士の墓に門外から手向け草として捧げた言葉を抄出して結びたい。

「凡人間のあだなることを観すれば、我々が腹の中に尿と慾との外の物なし。五輪五躰は人の体、何のへだてのあるべき、と、彼傀儡にうたひけん。公卿、大夫、士、庶人、士民、百姓、工商、乃至三界万霊等、この屎慾をおほはんとて、冠を正し、太刀はき、上下を着て馬にめす。法衣、法服の其品まちまちやといへども生前の蝸名蠅利なり。

たらちねに借銭乞はなかりけり」

この句はこの日、墓前で母を偲んで成ったものであろう。

子どもの見る力

――梶山彩色壁画古墳発見をめぐって――

森　浩一

〈きき手〉　角能清美

昭和五十三年七月、鳥取県で彩色壁画のある装飾古墳が発見された。このことは大きな話題を呼んだので、覚えている方も多いと思う。なぜ大きな話題を呼んだのかというと、これまではないとされていた地域から彩色壁画が発見されたことと、描かれていたのは、大きな赤い魚だったからである。私どもは、この壁画の発見者が小学生であったことに大変興味をもち、彩色壁画古墳であることを確認なさった、同志社大学の森浩一先生にお話を伺うことになった。森先生は一九二八年大阪市生れ。主な著書には『古墳の発掘』（中公新書）『考古学の模索』（学生社）『考古学入門』（保育社）『古墳と古代文化九十九の謎』（サンポウ）等多数おありになる。

梶山彩色壁画確認

――まず、今度発見されました、鳥取県の彩色壁画についてお話を伺いたいのですが。

森　六月の末に鳥取県の教育委員会の文化財の技師をしている、清水真一君が、仕事を離れて、昔から有名な国府町にある梶山古墳を見に出かけたんです。梶山古墳は横穴式石室ですから、一番奥まで入れるわけです。たまたま何人かの人と行ったら、石室の奥に大きな魚が描いてあるのが見えたんです。赤い絵の具、いわゆるベンガラ（酸化鉄でできている赤色顔料）で魚が描いてある。魚だけではなく、三角文や同心円

文も描いてあるのが見えたんです。

壁画というのは、気象条件によって見える日と見えない日があるんです。湿気を含んだ日は見えない。乾燥の状態が非常にいい時だけ、スッと浮びあがるんです。彩色壁画は、日本では九州（福岡、佐賀、熊本、大分）に多いのです。ここに絵の具をつかった彩色壁画や彫刻したものがたくさんあります。しかし九州を越えると少なくなります、四国に線刻壁画がひとつあるだけ、近畿地方には大阪と兵庫に線刻画はいくつかあるけれど、彩色壁画としては高松塚だけです。中部地方にはなく、関東には、茨城県にいくつか、東北には、福島県、宮城県にもある。大きく言えば、日本列島の両端に壁画があるわけです。中間地帯には、古墳壁画はきわめてわずかです。これは古代史にとって非常に重要な意味をもっているわけです。日本列島の両端に壁画が集中していることは事実であり、だから鳥取に彩色壁画があることになると、分布が変わってきます。

ところが、石室の入口がふさがっていて、発掘の過程で入口をあけて、石室の中に壁画があるのに気付いたのであれば、これは誰でも古墳時代のものと言うことができます。しかし、すでに大正時代から世に知られていた梶山古墳は誰でも中に入れました。こういう場合、その判定はたいへん困難で、その壁画が本物であるかどうかを確認し、自信をもって結論を出すのが、ぼくたち研究者の仕事になる。そういうわけで、七月二十日に鳥取の現地に行きました。後日、NHKのアナウンサーの話では、ぼくが壁画を見た最初のことばは「これはまちがいないよ」ということでした。清水君ら、県の三人の技師がついてきてくれましたので、これはまちがいないと言って、皆を安心させたそうです。ぼくは忘れましたけどね。

一目見ると、いいものと、なお検討を要するものと、全然だめなものというように大体わかります。顕微鏡でのぞいて、というような複雑なものではないんです。勿論再検討を要するものは、科学的な方法で確かめなければなりませんが、今度のものは、一目見てしっかりしているものであるとわかりました。そのために他の研究者仲間も、現地を訪れた人はこれを認めました。

確認以前

――すると、どうして今までそういうことがわからなかったのかということになりますね。

森　鳥取には、鋭い金属かなんかで絵を描いた線刻壁画は非常に多いのです。現在約三十か所の古墳に実に見事な、子どもの描いたような（実際は子どもが描いたのではないですけれど）自由奔放な絵がたくさん

あります。線刻画のひとつの宝庫だと思っているくらいです。最近、いくつも見つかりましたが、鳥と魚、あるいは木の葉が多いです。だから西暦六世紀頃は、古墳の壁に絵を描くという風習が強いところです。七世紀になって、線刻という技法にかわって彩色になっていって、梶山古墳を生み出すわけです。

実は十年ほど前に、鳥取の研究者の亀井熙人さんが、鳥取の県立博物館の雑誌にいくつかの古墳の線刻画について発表したのですが、そのときはいろいろな人から強い批判をうけた。ここが最も問題なのですが、それぞれの地方の文化、それぞれの地方のすぐれたものを自分たちで評価する力と意欲が全国的にかなり欠けているんです。このように、鳥取の線刻壁画が世に出た時にも苦労があったのです。今では定着しましたがね。若い研究者たちがせっかく研究してもそれを認めようとしない。これは単に若い研究者の意欲をそぐだけではなくて、それぞれの地域の独特のすぐれた文化を一般の人たちに隠してしまうことになるわけです。何か大和文化に似たものだけを顕彰して、あるいは強調して、独自の文化は日陰においておく。

だからぼくたちがそれを重要だと言ったりして、ちょっとでも手助けになることになればと思って、梶山古墳を見に行ったわけです。梶山古墳の場合には、幸い比較的早い時期に、つまりおそらくぼくが見て、一、二日後にはもう世間でほぼ定着してしまった。そうすると、今度はあれは知っていたという人がぞくぞくとあらわれたわけです。

おとなの思いこみ

――だれでも今まで入れた古墳ですからね。それで、どうなったのでしょうか。

森　専門家は、知っていたのに、とは言えないわけです。どうして知っていたのに黙っていたかということになりますから。そうではなくて、いろんな方が言い出されたのです。一番愉快なのは、何年か前に鳥取県自身が撮りました写真に見事に写っていたわけです。白黒の写真ですけど。鳥取の研究者たちは謙虚に反省してますが、彩色壁画なんてありえないという大前提、思いこみがあったのです。これは非常にこわいことです。

こういう思いこみはどこにでもあります。たとえば日本の四世紀には文字がないということを、おそらく百人のうち一、二の例外を除いては信じこんでいるでしょう。実際のところ、日本の各地からは文字を書いた銅鏡などはたくさん出てくる。けれど教科書的に言えば、西暦五世紀になってやっと渡来人がやってきて教えたことになっている。いつのまにやら先入観ができあがってしまうと、実際にかなりの文字の

資料が地下から発掘されてもそれを評価しない。

また別の例では、万葉集では東国の農民がたくさん和歌をつくっているでしょう。現在国文学の先生方の大部分の人は、東国の農民は文字を知らないが和歌はつくったと思っています。ところが土器に墨で字が書いてあるものを墨書土器っていうのですが、これは奈良県や大阪府からはそれほど出ない。けれども一例をあげると、千葉県八千代市の村上遺跡からは、一か所の集落遺跡で、墨書土器が約二百点でている。極端に言うと、ほとんどの家のあとから墨書土器がでている。字そのものはかんたんな漢字ですけれど。関東の墨書土器の多さを見ていると、万葉集ころの東国の農民も、どの程度かわからないにしても、万葉仮名で表わせる程度の基本語は書けたんじゃないかと思う。それでないと和歌なんてつくれないですよ。

そのように思いこみが非常に多く、いろいろと思いこみをしている専門家が書いた教科書が小学校以来ずっと使われているわけです。さらに学界で問題になったことは、だいたい五年位して教科書に「注」として反映しだします。この頃は少し早くなってきました。ただ専門家の全てが自由な頭を持っている人かどうかわかりません。ということは、学生時代に勉強したことがそのままずっとベースになっていくわけです。ですから各地域それぞれに思いこみがあるというのはやむをえないわけです。

今度の場合でも、いろんな方が鳥取の梶山古墳の壁画をすでに見ていたということ、そして中には高松塚での壁画検出以前に、鳥取県庁に言いにきた人もいたようです。しかし、そんなものはあるはずがないということで取り上げてもらえなかったということです。その中で非常におもしろいのが次のことです。

子どもの目

森　これは鳥取県の郡家町大坪下私都小学校の児童が、国語の教科書に「古墳の話」というのがあるそうで、毎年その頃に古墳を見に行くんです。梶山古墳は石室がきれいで非常に見学しやすい古墳です。その小学校から約三キロメートル離れている。三好孝美先生が、五、六年生男子九人を引率して見に行ったんですね。昭和五十二年十月十五日のことです。まだ世の中で梶山古墳の絵が問題になる前です。その時に子どもたちが、魚の絵があるというので大騒ぎになった。

その学校では学級通信『空いっぱいのぼくら』というのを出していて、その中でこの先生はこういうことを書いています。「梶山古墳は、岡益にあって、七世紀末期の割合新しいものです。玄室はそれぞれの壁が凝灰岩の一枚岩でできていて、なかなか

立派なものです。子どもたちはつきあたりの壁に魚の絵があるといって騒いでいましたが、そういうことはないと思いました。全員無事に帰ってきたようです」と、こういう記録を残しておられました。この先生は子どもたちと絶えず意見交換をやっていらっしゃるようで偉いと思うんです。

そのときの現場の状況を想像してみるとなかなかほほえましい。子どもの方は魚の絵があるといって騒いでいる。先生が「そんなもの、鳥取にはないわよ—」と言っても、子どもの方は魚に見えるといって騒いだのじゃないですかね。今度のことが新聞に載って何日かして、この学級通信が、ある新聞記者の目に触れたのですが、私にとって、最近、これほど愉快なものはなかったんです。こんなものはかっこ悪いから人に見せないのが普通ですが。こういういい意味の反省はすがすがしいですね。この学級通信は、七月に問題になる以前の、おそらく唯一の文字になった記録でしょう。

正直言って、この梶山古墳を、代表的な学者は皆見ていたわけです。もちろんその日の気象条件で見にくい日はありますが、誰か気付いた人もいたでしょう。その中で子どもたちがはっきりと意見をいったというのは、やはり子どものものを見る力はおそろしい。今の教育というものは、うっかりすると、教科書や参考書、大百科事典や塾の教育など、いわゆる常識でおさえつけていくきらいがあると思う。そんなところに、たいへんこわい問題が現在はつきまとっているわけです。

考古学とは

森 考古学というのは、物を見る学問です。つまり古代の人がつくりあげた古墳や家のあと、土器とか石器とか、そういう実際のものから歴史を研究する学問です。ですから非常に子どもの間でもわかりやすいようです。

ぼく自身は、小学校六年生の頃に、その頃は戦争中でしたけど、国語の時間に古代の生活という文章を習ったんです。そのあとで川の中で土器を拾ったので、担任の先生に見せたら、教科書で教えてすぐに落ちているはずはないと言われました。そのときどうしても拾ったものが今のものとは思えない。幸い家には本が多くあったので、百科事典や『日本文化史』という本を一生懸命にひいたんです。そしたら『日本文化史』の中に「土器の内側にうずまき文のある青色の焼き物は朝鮮式土器である」と書いてあった。今でいう須恵器です。それに違いないと思った。この土器は長いことぼくの机の抽出しにありました。ぼく自身、ずっと後になってその土器の破片を見たら、まちがいのない、西暦六世紀の須恵器でした。今はない。安心して放ったのかなあ。取っておくべきでした。

そのときに、もし逆に担任の先生が、かんたんに「これ土器ですよ」と教えてくれていたら、ぼくは意外に興味もわかなかったかもしれませんね。小学校六年生で、百科事典のどこをひいていいのかわからないですから、いろんなところをひいたと思う。そうして確かめていく過程がおもしろかった。そのとき、おとなたちの言うことを信用してはいけないと思いました。小学校の先生が違うと言っても、ぼくは疑っていたわけですからね。

考古学というのは非常に早くから興味を持つ人が多いのです。今でも小学校四・五・六年生くらいの子どもから手紙がたくさんきます。非常に入りやすい学問です。博物館に行けばすぐに実物が見えるわけです。ちょっと郊外に出れば、実際の古墳の上に現実に立ってみることができます。他の学問と違う面ですね。かんたんに身近に確認することができるわけです。

壁画に描かれた魚のなぞ

――壁画に描かれている魚などはいったいどんなことを意味しているのでしょうか。

森　壁画の多くは、本当に自由奔放な絵で、現在の児童画と同じ表現のものもあり、ぼくを含めて皆、意味を読めないのです。鳥の絵ということ、馬が走っている、舟をこいでいるということはわかる。しかしどうしてそこに舟を描いているか、鳥を描くのか、どうして鳥を斜めから見て、羽を小さく描いているのか、いろんなことが解けないのです。残念なことなのです。壁画がどこにあるのか、何を描いてあるか、いつ頃のものかということは、考古学の発達でずいぶんわかってきたけれど、どういう意図で描いてあるのかという根本のことはわからない。

逆に言うと、我々おとなたちが、極めて素朴な衝動といおうか、人間のあたりまえの行動がわからないようになっているわけです。学問的にいろいろの意味をつけるけれど解けない。日本だけではなく、朝鮮にも古墳以外に、自然の岩蔭に描いた魚や動物がたくさんあります。なぜ描いたのか解けません。年代とか文化の系統とかはわかる。しかしなぜ描いたのか解けないというのは、今のおとなたちがあまりにも難しい学問にしばりつけられ、自分たち自身をむずかしくしてしまったのではないかなあ。

――壁画の絵にある魚や鳥は、日本だけでなく他にもありますが、それは文化の流れなのでしょうか。

森　有名なのはフランスとスペインのものですが、イギリス、デンマーク、それからアフリカにもあります。日本のものでも、シベリアのでも、イギリスのでも、皆どこか似ています。だいたい描く対象も似ているし、共通の表現をしています。これは、やはり似た精神の発達状況にあれば、似た

ものを似た方法で描くということがひとつと、もうひとつは、非常に長い時間の中では、人間は動いているわけです。

たとえばポルトガル人のバスコ・ダ・ガマが一四九八年にはじめてインド洋を横断したと教科書では教えていますが、それ以前の中国の焼き物がアフリカの地下からたくさん出てくる。中国人やアラビアの人たちがインド洋を横断して、年中行事のようにアフリカへ行っていたらしい。バスコ・ダ・ガマはヨーロッパ人としてはじめて渡ったにすぎない。今の教科書のような教え方をしたら、人類ではじめてインド洋を渡ったのがバスコ・ダ・ガマだと思うでしょう。人間の移動という問題も、実際でない知識が先にできている。そうではないということが考古学の発達でずいぶんわかってきたのです。

最近アフリカ各国の考古学者はピラミッドのようなものではなくて、自分たちの先祖の残した都市、町を掘りかけています。エジプトや南のローデシアの地下からもおびただしい中国の焼き物が出てくる。日本でいうと鎌倉、室町時代のものです。今までそういうものは歴史の材料にならなかった。今、それではだめだということで、さかんにエジプトをはじめ、アフリカ各国の歴史を復元する。それはやはり考古学です。するとわかることは、人間は非常に古い時代から動いている。そのかわりに長い時間がかかるんです。人間一人の一生の仕事というのは、一回ずっと遠いところまで旅をすればよかったのかもしれません。

たとえば、ソ連のサマルカンドの郊外に宮殿があって、その宮殿の壁画の中に高句麗の使者が二人描いてある。高句麗滅亡直前のものです。高句麗の人達がサマルカンドまで行っている。むこうまで行けば、ヨーロッパの人達がたくさんきている。そこで知識などが伝わってくる。これはたいへんなことです。本当に一生の命を賭けたような旅で、世界中の知識が意外に広い範囲で動いていたんです。

現在の日本の教育

――最後に、現在の日本の教育についてお気づきのことがありますか。

森　一昨年イギリスに行きました。ごく短い旅行でしたけれど。イギリスに有名なストーンヘンジという巨石の遺跡がある。それを是非見たくて行ったんです。十一月の二十八日か二十九日の寒いときでね、雪まじりの雨が降って。ストーンヘンジまでは割合かんたんに行けました。それからさらに奥に行ったところに、ヨーロッパ最大の円墳があるんです。それを見に行って、さらにヨーロッパでもっとも長い古墳、前方後円墳ではないのですが、百メートルほど長さがあるんです。ウェスト・ケネットというところです。それも一日のうちに見よ

うと思ったんです。

雪まじりの雨が降って、牧場の中を横断しようとすると、靴よりも上まで水がくるんです。それに風化した柔らかい土ですから、すべるんです。もうやめようかと思った。ウェスト・ケネットは見えないし、付近には人が全然いない。あきらめかけた頃、若い男の先生と小学生二人が帰ってきたんです。どろどろになって帰ってきた。ぼくはびっくりしました。いきなり現われたのですからね。どうやら古墳を見に行ってきたらしい。ぼくを見て、その服装では絶対だめだと言う。皆は長靴をはいて、レインコートの短いのを着て、それでもどろどろです。しかし、かれらを見てはっとした。つまりイギリスの小学生が見に行って、考古学をしている私がそこまで行ってみないのはだらしがないと思い、行きかけたんです。

途中でぞくぞくと帰ってくる子どもたちは皆どろどろ。四十人くらいの人数でした。皆激励してくれるんです。じっと考えてみると、子どもたちは、最初から雨でも行く服装です。皆、短い長靴をはいて、かっぱを着ている。ひっくり返った子どももいて、もうどろどろです。日本の今の教育で同じことをやったら、父兄から非難がでます。雪まじりの雨の中を行ったら風邪をひきませんかとかね。むこうはそれを承知で、全員が長靴をはいてました。日本の今の小学校だったら、先生方がこんな天候ならやめるとかして、まず副次的なことを心配する。本来の、そこを見せてやろうというのが二の次になる。イギリスの小学生の古墳見学を見て、最近日本には欠けているたくましさを感じました。ぼくがウェスト・ケネットに行けたのも、あの子どもたちがどろどろになって帰ってきたからです。あれに会わなかったら、あのときぼくは、これで行ったら肺炎にでもなってしまうなどと弱気の言いわけの気持ちでしたから、行かなかったでしょう。

また、大英博物館で、ぼくと同時に中学生の一団が入った。そしたら一日いるんですね。先生が印刷したプリントには裏表びっしりと問題がならんでいる。ぼくはびっくりしました。イギリスの文字の発達についての質問でした。ロゼッタストーンのことも出ているし、イギリスで一番古いバイブルの手書きはどれかとか、たいへん克明な質問でした。あれだけの質問を書きあげようと思ったら、先生が何回も博物館に予察に行っているはずです。中学生は朝十時から午後三時までいました。

イギリスは、今、日本人はそれほど関心を持っている国ではないようですが、小中学生の教育はたくましくやってますね。これら二つの例で、ぼくは日本の教育は、今ちょっと、温室育ちで、言いわけの教育になっているような気がするのです。（了）

運動教育雑感

松本千代栄

最近の出版物には、〝遊び〟や〝身体〟を再認しようとする論が多くみうけられ、日本の中にも漸く身体文化の夜明けが近づきつつあるかと感じさせられる。

幼児の運動教育も、急速に多様化し、余暇の増加した母親と共に種々な形態で行なわれている。幼稚園における運動教育、――なかでも律動的な運動教育についても、百年の歴史を越えて根づいた伝統の深さゆえに、現代的な視点で再認されなければならないときであるだろう。

運動パターンのドリル

幼児の運動教育の一つに、リズミカルな動きの上達をはかる場面をみうける。スキップやかけ足などのステップが行なわれたり、また、リトミックとして体系だったドリルが行なわれたりしている。リトミックは、Dalcroze Eurythmics として、E・J・ダルクローズ（1865～1950）が、運動感覚とリズムとの有機的な

結合をはかり、リズム教育として開発したものである。園によっては、幼児の運動教育の主な内容の一つとなっていることは、種々の調[1]査結果から明らかである。

実[2]験的観察の一例をみてみよう。

三歳児、三十分の保育時間の中で、指示内容は直接、幼児の動きを指示し（音にあわせて手を叩く・歩く、音の高低にあわせて手の動作を行なう、音の強弱にあわせ動く、音符を言語化して動く、……など）幼児はそれに対してすばやく反応し、所与の動きを実現する。刺激―反応の一定のパターンがくりかえし行なわれ、反射的な行動として形成される仕組みになっている。たとえば、音符の長さどおり足をはこぶ運動パターンは、音刺激の正確な把握と敏速な反応が要求され、三歳児は、その急転換のスリルに興味づけられて、活気をもって行なっている。

四歳、五歳児については、リズムパターンが長くなる、音符を視聴覚上にとらえて反応するなど、複雑になり、反応の正確さを増すが、幼児の表情には生彩を欠くと観察者は認めている。

メトロノーム音を与えて大筋の律的調整（けんぱ、けんけんぱなど）をみた結[3]果でも、三歳児と四・五歳児との差は大きく、四歳を境とし、五歳児の運動に対する適応の幅は急速にひろがると認められている。

スキ[4]ップのようにやや巧緻的な動きについても、四、五歳でできるようになる率が高い。

このような諸結果から、ただちに短絡的に結論づけられるものではないが、運動パターンのドリルの内容について、また、その方法について、現行の基礎的な運動教育に一つの問題点を提示していると考えられる。すなわち、単純な指示―→同一反応というドリルの形態と内容が、幼児期すべての段階で等価値をもつとは認めにくく、その臨界点を考えて活用すべきであり、更に上位の内容と方法の階梯がほしいと思われる。

幼児期の運動教育の基礎となるものは何か――考えると問題は深くかくれているようである。

運動パターンの創造

幼児の運動教育の中で、もう一つの側面に、見たこと、感じたことを身体の動きでくふうし表現する活動がある。一般には自由表現とよばれている。（あまり賛成できない呼び名であるが――）

ここでは、直接的に運動を指示する形態ではなく、多くはイメージを与えて、動きを個々に選択させ発見させる方向がとられて

いる。戦後における、最も大きい転換の一つであった。最近行なわれた指導者養成校（大学・短大・専門学校）の指導者や保育者に対する調査[5]では、解答者の殆んどが自由な身体表現の指導を、授業内容の一位にあげており、その分野に対する価値意識を高くなっている。三十年の歩みである。

今日では、各地にすぐれた指導例もみられ、一つの指示から、多反応を予想し、更に、幼児自らが、連鎖的、飛躍的に発想し、自発的に表現をはこぶ契機を含んで行なわれる形態もかなり定着したかにみうけられる。

課題を与え、自らの動きを発見させる――ひきだす保育は、運動パターンの探究のプロセスである。前述の、運動を操作する――（動きの姿勢、位置、パターンや熟練度を、感覚器官によって認識し識別し、正確に遂行する）活動に更に加えられる活動をもっている。すなわち、個々のユニークな発見・創造の過程であり、また、それを実現するための試行錯誤やコントロールの実践である。運動パターンは、幼児の内部過程で選択され、自身の身体の動きによって外在化されているのである。

このようにみるとき、課題――→発見の運動教育は、前者と等しく律的な基盤に立ちながら、そのプロセスにおいて異なった人格とのかかわり方をもち、人格を内包した運動として個々の出現をはかっている独自の活動とみられるだろう。

しかし、創造的な教育が、高い価値を認められながら、方法上に困難を示すのは、運動教育においても例外ではない。前述の調査においても、指導方法に関する困難点が訴えられている。

隘路はどこにあるのであろうか。

その一つを、〃イメージを運動化するためのみとおし力〃とみるのはどうであろうか。創造の過程では、その準備の段階に、種々な情報をあつめ、あたため、ひらめきのときを待つといわれる。幼児が運動パターンを創造しようとする場においても、イメージの多様な展開、運動パターンの多様な質的変化についての情報がのぞまれるだろう。

〃蝶になりましょう〃という課題の設定だけでなく、〃身を急にひるがえす、大きい小さい、花上に呼吸をひそめる蝶〃など、動きのイメージとむすびつく多様な情報を得て、〃変身する蝶や複眼の蝶、美しく身軽い身のこなし〃など、幼児は個々の視点をひろげ、内的なイメージと外的な運動イメージの像を融合させて、好みの運動パターンを発見し、表現を実現していくものではなかろうか。

イメージと運動化、これに対する探求の手引は、運動教育にたずさわるものの、さしあたっての課題ではないだろうか。多様な

個性に応じる多様な道程をもちたいものである。

ドリルと創造をめぐって

眼を転じて他の運動教育をみてみよう。

創造的な運動教育を一貫して発展させている点で日本とイギリスは似ている。しかし、子細にみるとき、創造的な動きの発する源には距りがある。日本ではイメージから動きをひきだし、イギリスでは、運動の質的要因から動きをひきだす歴史をもつ。動きからイメージへの方向ともみられよう。エジンバラの友人、M・ウエブスター教授は〝日本の動きには心があるからいい〟と評し、我々は、R[6]・ラバンのシステムに発する、動きの創造を導く教育（Art of Movement）に深い関心と敬意を払っている。

▲ F1

先年、訪れたクラスの活動をみてみよう。幼児の日常生活には、身体意識（Body Awareness）と運動の原則にめざめさせ、自らくふうし、発見するように総合的な展開がみられる。新聞紙大の黒い用紙にポスターカラーで大胆に身体を描く四歳児たち（F1）、〝坐る—身体を拡げる、空間にまるく—全身をつかって動く時々は後へ動く……〟などとしるされて描かれた身体運動の絵画や、粘土での造型（F2・次頁参照）は、一方に運動への刺激であり、同時に、消えていく運動のフィードバック、その確かな定着への手引とみられた。運動の探求とその創造の遊びとして環境に自然にとけこんでいる。

運動パターンの指導には、教育当局の指導の手引にもみられるように、動きについて

①何を（身体意識、相手関係）

②いかに（動きの力—時間—流れ）

③どこへ（個人の空間、全体の空間）

を柱として手がかりが与えられる。

たとえば、〃どんなに廻れるかしら〃という動機づけから、子どもたちは、自転し、空間を移動し、さては跳びあがって廻るなど、動きを見出し、よりスムーズに行なわれるように挑戦する。(F3)

示される要因は一つでありながら、同一化の方向へ動きを進めるのでなく、個々に発見し多様化する方向へ進められている。

また、動きは、抑制的な動きでなく、静止と運動を両極に拡大していくように、ダイナミックにはこばれる。一人一人に限界への挑戦の楽しみを与え、力動的な動きによる解放感と満足、更に、友だちといっしょにくふうする楽しみが加わってくる。時々はイメージへもつながる。詳述する紙数はないが、創造を内包したドリルとして、これらの運動の原則と展開は、我々のイメージの運動化にも多くの示唆をふくんでいると思われる。

運動パターンのドリルと創造——幼児の運動教育に始まり、舞踊文化につながる大きな課題に対する興味は尽きない。

(お茶の水女子大学)

▲ F2 4.5歳～6歳児の製作

▲　F３　６歳児　　課題ターニング
一人一人がいきいきと，まわる動きを工夫する

注
(1)「幼児教育における身体表現活動についての一考察」永井正子　お茶大修士論文'74（舞踊教育学専攻）
(2)日本女子体育連盟紀要'75年
(3)「情操と表現」　幼児教育学全集６　小学館
(4)「幼児の運動能力の発達」　東京教育大学体育心理学研究室
(5)「動きのリズム指導の現状と問題点」　若松美恵子　舞踊学会　昭53
(6)「モダンダンスのシステム」　Ｖ・プレストン・松本訳　大修館書店

＊
＊
＊

『復刻・幼児の教育』

〔趣旨〕

『幼児の教育』は、明治三十四年に『婦人と子ども』と題して創刊されて以来、わが国の保育の発展と歩みをともにしてきた。その後今日に至る七十余年の間に、この誌上で発表された記事や論説は、保育理論の先駆的な役割を果たし、わが国の幼児教育の発展に寄与するところ大であった。また、雑誌出版史上においても、現在まで継続する最古の月刊誌のひとつである。

本雑誌の戦前版は、月刊誌という性格上、また震災、戦災による焼失が相まって、今日では研究機関ですら、完全な揃いは皆無であり、研究者が容易に閲覧できない現状である。一昨昨年の幼児教育百年、今年の国際児童年と、幼児の問題に対する一般の関心は、著しい高まりをみせている。

この機会に、わが国の幼児保育の進歩の様相を目のあたりに概観する好個の原資料として、また先覚者たちの抱負と熱意の結晶する稀有な文献として、同誌戦前版を復刻刊行する。

〔体裁・内容〕

全二〇巻、別巻一、A5判、クロス装、外函入、題字・東山魁夷、別冊記念論集

《一巻～二〇巻》『婦人と子ども』明治三十四年～大正九年

※わが国幼児保育の普及期

※一年分を一巻に合本。各巻平均六百頁

○表表紙から裏表紙まで、広告頁も含めて、完全に復刻する。

○色刷の表紙も、できる限り近い色で再現する。

○写真印刷上、出にくい文字部分の一部修正のほか、原則として原本に手を加えない。

○今回の復刻を第一期とし、時機をみて、残りの戦前版部分を第二期として刊行する。

《別巻》二八〇頁程度

・解題　〝『幼児の教育』戦前版について〟

・東基吉・倉橋惣三の関係論攻

・総目次　戦前版すべての目次を収録

・年表　幼児教育百年史

〔刊行〕　名著刊行会

〔予価〕　現金価格　一八〇、〇〇〇円

〔申込・問合わせ先〕　総発売元・株式会社コーディック

東京事務所　東京都千代田区神田神保町一―四七　大森ビル

TEL　東京（〇三）二九五―〇一八五～六

本　社　大阪市東区今橋二―二二　藤浪ビル

TEL　大阪（〇六）二二七―五三四一（代）

私の保育

宇田昭子

一、私の好きな時間

一日の保育が終わり、子どもたちが帰った後の保育室にもどる。床を掃き、机の上をふき、遊具を整頓し、その日子どもたちと一緒にできなかった飼育物の世話（水を取り替えたり餌を与えたり）をし、と私はせっせと身体を動かす。そして、この時、身体を動かしながら、私は、胸にいろいろな思いをよぎらせている。失敗したなあという苦い思いあり、こみあげるうれしさあり、心地よい疲労感あり、消耗感あり、時に充実感あり、その日その日のいろいろな思いを、今、別れたばかりの子どもたちの顔、声をありありと思い浮かべながら、味わう。

「今日のYちゃんはおもしろかったな」「NちゃんはTちゃんと一緒でうれしそうだった。」「Mちゃん、やっと～ができて、やっぱりうれしそうだったわ。」「今日、あの時Kちゃんを叱っちゃったけれど……」など、乱暴に投げ入れられたYちゃんの上ばきを直そうとし、ころがっているままごとの茶碗を拾い、あるいは、引き出しからはみ出しているYちゃんのはさみを中に入れようとする手を時々、止

めながら、私はとりとめもなく心に浮かべる。そして、考え、反省し、もう一度味わい、自分に問いかける。また、現在、一緒にクラスを担任している先生と（私たちの幼稚園は複数担任制をとっている）思いつくままに話してみる。私は、この時間がとても好きである。

子どもたちとの一日は、振り返る間もなくあっというまに過ぎてしまう。であるから、子どもたちが帰ったあとのその時間は、その日を子どもたちと共に、自分を振り返ることもなくすごしてしまった私にとって、ふと足を止め、自分を振り返り、子どもたちの姿を思い返すことのできる大切な時間に思えるのである。そして同時に明日への心の準備をする大切な時間だと思うのである。床を掃いたり、ザリガニの水を取り替えたり、遊具の整頓をしたり、その日一日子どもたちがたっぷり遊んだ保育室の整頓をするために手を動かしながら、私は同時に、明日への準備もすることになる。私の心の中で起きていることも同じで、とりとめもなくその日を思い返しながら、同時に「明日はNちゃんどうするかしら」「明日はきっと……」など、明日の子どもを思いながら、反省を土台にした新たな心構えや、わくわくするような期待を、心にもったり、余計な疲れから曇ってしまった自分の心の目を少しはみがいてみたりして、明日への準備をしているのだと思う。

今日一日のことを自分の心と身体で思い受けとめ、確かめ、少しは整理しながら、明日への準備を、やはり心と身体でする。私はこの時間が好きである。そして、忙しく流れがちな教師生活の中で、私の大切にしたい時間の一つである。

二、うれしいこと―子どもたちとの出会い

子どもたちとの生活をしていて、うれしいと感ずることは数多い。しかし、私にとって中でも、最も「うれしい」と感ずるのは、ある子どもがいて、その子どもが初めて自分というものを出してくれた時、私に対して自分の心を開いてくれた時、あるいは、初めてその子どもと「あ、心がつながったな」と感じられた時である。言い換えれば、その子どもと「真に出会えた」と感じられた時である。それは、幼稚園で初めて子どもが自分から遊び出した時であったり、私に自分の気持ちを初めて話してくれた時であったり、思わぬ子どもが思わぬ時に私を驚ろかそうと何か隠し

持ってきて私の前で見せてくれた時であったり、何か共通の体験をして、目と目が合い思わず笑ってしまった時であったりする。

そういう「時」を境にして、私と子どもとのつきあいは違ったものになる。本当のその子どもとのつきあいは、その「時」から始まるように思う。

私はこの間、本棚の隅から実に久しぶりに初めて受け持った子どもたちの個人記録ノートを見つけ出した。そして懐しい思いでパラパラとめくって見るうちに、さまざまな子どもたちとの出会いが、まるできのうのことのように思い出された。そのいくつかを、ここに書かせていただこうと思う。

〈K男のこと〉

入園式の次の日、K男は登園した時から泣いている。他の子どもたちが積木やままごとで、そろそろ遊び始めても、入口につっ立ったまま全く動こうとしない。私はK男の心が動きそうな遊びに誘ってみる。しかし、K男は「いやだ」ときっぱり拒否する。まだ涙のかわかない顔で、精一杯の抵抗を示す。この日は最後まで同じ調子で過ごす。

次の日も次の日も、K男は「幼稚園なんか嫌いだ。」というようなかたくなな表情で、私の言葉かけ、はたらきかけのすべてを受けつけない。どうしたらK男は心を開いてくれるのだろう、私は途方に暮れた。

そして、四日目のこと、例によってかたくなな表情でつっ立っているK男に、私は「無駄かな。」と思いながらも、他の子どもたちが遊んでいる積木に、「Kちゃんもやらない？」と誘ってみる。「いやだ。」という反応。やはり、はたらきかけ方がまずいんだな、と私はがっかりする。ところが、その直後、K男が目の前にあった積木を足で蹴った。私は思わず、「あっ、Kちゃん怪獣だ。」と言う。すると、あのかたくなだったK男の顔が、思わずほころんでしまった。私はうれしくて、すかさず、もう一度「Kちゃん怪獣だ。」と言う。すると、「かいじゅうじゃないよ。」と言いながらK男は私に組みついてきて、両手両足を使って、私をたたいたり蹴ったりする。顔は真赤になって、しかし、笑っている。私もすぐ、怪獣になった。

その後は、「ぼくビルを作るんだ。」などと私に報告すると、K男は積木で遊んだ。私はやっと、自分を出すようになってくれたかとうれしく思い、ほっと胸をなでおろし

た。少々乱暴だったが、こうしてK男は、自分の殻を打ち破り、自分を出すようになった。私自身も、どんなはたらきかけをしてもつながらなかったK男の心と、とっくみ合いを通して、隔てていた壁を打ち破ることができ、その時から、心を通わせることができるようになった気がするのである。次の日からK男は笑顔で登園するようになる。不思議なことに、クラスで最初に、心からふれ合うことができるように感じたのは、K男だったように思う。

〈N男のこと〉

入園式の次の日、とてもおとなしそうな子だなという印象を、私はN男に対してもつ。三日目、N男は、積木を並べて汽車のようなものを作る。そんな姿を見ると、私は、「君の作った汽車にのせて」と早速、かかわっていく。N男は、困惑と照れとが入り混じったような顔をして、その場から離れていってしまう。これは失敗だ。なぜ、もう少し待ってやれなかったのであろう。自分の性急さを悔やむ。N男は、まだ私などにかかわられては困るのである。やっと、幼稚園で積木を並べることによって、自分を少しずつ出してみて、ためしているところであるのに……。かめが首をそっと出してみたら、コツンと石にぶつかり、あわてて、出した首を引っ込めてしまうように、N男は自分を引っ込めてしまった。

その二日後、二、三人の子どもたちが、お店ごっこのようなことをしていると、積木で作られたそのお店の台の下に、N男はもぐりこんでいた。私は、あまり気にとめずに、「くださいな。」とそのお店に買いに行く。すると、驚いたことに。積木の下からN男が、「ここにもありますよ。」と私に声をかけた。私は、精一杯の（と私には思えた）N男のそのことばに、できるだけさりげなく、「じゃ、二つください。」と、内心はうれしさで飛び上がりたい程だったが、言う。N男は消え入りそうに照れながら、しかし、売ってくれた。その日は、たったそれだけのことである。私は、この前のことがあるので、「あせらない、あせらない」と自分に言い聞かせながら、それで満足した。

次の日も、N男は、友だちがお店を始めると、その積木の下にもぐりこむ。今度は、私の方から「これください」とかかわる。N男は、私に品物を渡すと、すぐ積木の下にもぐりこんでしまう。まだまともに私の顔を見ない。しばらくたって、私は「Nちゃん、上でもお店できますよ。」と

誘いかけてみる。しかし、やはり、この日はもぐりこんだままであった。翌日は、友だちとふたりで、積木で何か作っている。「落とし穴」だそうである。でき上がると、大声で（初めての大声で）「せんせー」と呼ぶ。そして、「この中に手をつっこんでごらん。」と、私を驚ろかそうとする。その後は、何人かの友だちや、私と一緒に、追いかけっこをして遊び、初めて思いっきり身体を動かした。私のはたらきかけが特にあったからN男が変わった、というわけではない。しかし、N男の中で、少しずつ変化は起きていた。追いかけっこをしながら私は、「ああ、N君とは、もう大丈夫だな。」と感じた。

〈Mちゃん（二年目に受け持った子ども）〉

Mちゃんは、いわゆる自閉的な傾向のある子どもであった。「Mちゃん」と声をかけても視線すら合わせない。手をつないだり、だいたりしようとすると、するりと身体をかわして逃げる。無理に手を引いたりすれば、泣いていやがり、ひっくり返って泣きわめく。登園すると、自分のへやに来ることもなく、帽子とカバンと園服をどこへでも投げ捨て、ひとりで園庭を走り回っているMちゃん。いったい、どう近づき、どう心のつながりをつけていったらいいのだろう。できるだけMちゃんの行為を受け入れ、Mちゃんが好きなことをしている時にかかわりを求めてみたり、同じような格好をして一緒に走ってみたり、時には、私が最低限、Mちゃんにしてもらいたいと思うことを強制的にやらせようとしたり、いろいろなことを試みた。しかし、たいていは、むなしく終わり、途方に暮れることの多い日々が、二か月余り続いた。

ある日、Mちゃんは、園庭の水をはったたらいで水遊びをしている友だちの近くに行き、見ていた。Mちゃんは、水に興味があり、それまでも何度か、水のある所へ行って水遊びをしようとしたことがあった。しかし、気温があまりにも低かったので、かぜをひいてはいけないと、私は、やめさせていた。Mちゃんは、なぜとめるのかと抗議するように泣いていやがった。が、しかたがなかった。しかし、その日は、むしろ暑いくらいの日であった。私は、すかさずMちゃんをへやに連れていき、水着に着替えさせた。Mちゃんは、さほど抵抗せず、水着になると、自分から急いでたらいの所へもどった。私もすぐにMちゃんのあとを追う。Mちゃんは、やはり水で遊びたいのである。

私は、じょうろに水を入れ、Mちゃんの背中にかけ、手でピシャピシャとやりながら、「つめたい、つめたい」と言う。Mちゃんは、「キャッ、キャッ」と笑って逃げる。私は追いかける。近くにいた他の子どもも、じょうろに水を入れて一緒にMちゃんを追いかける。私たちは、Mちゃんに追いつくとMちゃんの肩や背中にじょうろの水をかけた。Mちゃんは、その度に、「キャッ、キャッ」と笑い声をたて逃げる。逃げながら、こちらを見ている。私はうれしくて何度も水をかける。「一歩、近づけた。」と、その時感じた。その日、Mちゃんは、そのあとで、何かの拍子に自分から私のひざの上にのってきた。

Mちゃんとは、その日からすぐに、心がスムーズに通い合うようになったわけではない。「あ、つながった」と思うと、また離れてしまったように感じるまだ不確かなふれあいではあった。しかし、その後のMちゃんは、私と目が合ってニコッと笑ったり、じっと見つめたり、私のひざや肩の上にのってきて甘えるようなことがあったりし、確かに以前とは違ってきた。Mちゃんと、ふれあうことができるようになったのは、あの日の水遊びの時以来だと、私には思えるのである。

子どもたちとの、忘れられないさまざまな出会いが、このほかにもある。一つ一つが新しくて意味があって、その度に、私は教えられることばかりであった。

三、今、思うこと

私が幼稚園の教師となって子どもたちとの生活を始めて、三年半という歳月が過ぎようとしている。早いものだとつくづく思う。子どもたちひとりひとりを大切にできる保育者になりたい、子どもたちと共感できる保育者になりたい、そして、子どもたちと過ごすこれからの一日一日を大切にしたい、そんな思いを胸に、三年半前、保育者としての第一歩を踏み出した私であった。しかし、今、新ためて「ひとりひとりを大切にする」とは、どういうことなのだろうと考えてみると、なんと難しいことなのだろうと思う。自分を振り返ってみても、初めはただ子どもたちに「やさしく」接したり、子どもたちの行為をむやみに受け入れ認めようとすることが、ひとりひとりを大切にすることだと思い込んでいたような時期もある。しかし、どうやち、そんなに簡単なことではないようである。これから

も、それを模索していくことになるであろうが、今、思うことは、できるだけ子どもたちと共に動きながら、子どもたちの真の姿を見つめ、子どもたちと共感することができるような、柔軟な目と心と頭を持ち続けられるよう努めることが、ひとりひとりを大切にすることにつながるのではないかということである。

一年目は、保育者一年生の私にとって、見ること、すること、ぶつかること、すべてが、初めての経験であった。それ故、子どもと共に、(それこそ同じ次元で)困ったり、迷ったり、驚いたり、うれしかったりした。失敗も多く、そのために必要以上に子どもたちを混乱させてしまったこともある。一日一日が新鮮で、子どもたちの一つ一つの行為、変化に、驚いたり、困ったり、うれしく思ったり、いろいろなことを感じていた。子どもたちを「指導」することに必死で、子どもたちを前にしながら、子どもたちが見えず、自分の思い通りに子どもたちが動かないことに途方に暮れ、消耗感だけを感じた日がある。子どもたちと思いっきり汗を流して遊びきった日もある。しかし、そうした日々に、子どもたちから教えられることは、数えきれないほどあった。

三年以上たった今、思えば教師としての私は、初めの年ほど、子どもと一緒になって困ったり驚いたり迷ったりすることは、少なくなった。幼稚園生活の一年間の流れというものがわかるようになり、いい意味でも悪い意味でも、子どもの行為がある程度予測できるようになったからであろう。しかし、そんな今だからこそ、気をつけなければならない、と私はときどき思う。「慣れ」という垢で曇った目と心で子どもたちに接し、三年間で身につけた保育の「技術」だけで子どもたちを動かし、三年間の教師生活で「教師らしさ」が身につけばつくほど、ともすると強くなりすぎる「指導」の臭みで子どもたちを引っぱっていき、まるで忙しく回転する車のような日々の惰性のうちに、子どもたちとの一日一日をただ流してしまうことのないよう…。私は、これからは心して、ときどき立ち止まって、振り返り、自分の目と心と頭の曇りを取り除き、それからまた歩む、ということをしていかなければならないと感じている。

(東京・練馬区立北大泉幼稚園)

ルソーの夢
——むすんでひらいて考——（その五）

海老沢敏

四、〈ルーサウ氏が睡眠中夢に作りたる曲〉

前章で引用した明治十五年一月三十日（および三十一日）の公開大演習のプログラムは、正式には《唱歌并音楽演習手続書》と名づけられているが、当日会場で配布されたこのプログラムのほかに、メイスンが書いた手書の英文プログラムが上伊那図書館に所蔵されている。この英文プログラムの〈見渡せば（箏胡弓合奏）〉の項目は〈Rousseau's Dream (Koto & Jap. Violine)〉と記されているのである。ということは伊沢修二を中心として音楽取調掛の面々が、〈見渡せばあをやなぎ〉、ならびに〈見渡せばやまべには〉の歌詞をつけた旋律、あるいは歌が《ルソーの夢》と題

二つの稿本によって伝えられている伊沢修二の《唱歌略説》の中で、《見渡せば》の原曲が、ジャン・ジャック・ルソーの作であり、それも彼ルソーが睡眠中に夢の中で作曲したと説明されている点から論じてみることにしよう。

伊沢がこの解説原稿を執筆するに際して、メイスンから情報の提供や指導を仰いだことはうたがいない。

されたものであったことを知っていたことになるだろう。

事実、この旋律は欧米にあっては、当時、すなわち十九世紀後半には、この《ルソーの夢》というタイトルで、かなりひろく知られていたのであった。その意味については、やがて述べることになるが、伊沢修二がメイスンからこのタイトルとともに、このタイトルがつけられた由来についても説明を受けたであろうことが推察されるのである。

前章の最後に遠山文吉氏の唱歌集ならびに掛図の歌曲の出典調査について触れたが、そこでも、メイスンがたずさえてきたと考えられる教材集《ナショナル・ミュージック・チャーツ》および《ナショナル・ミュージック・リーダーズ》の中にも《見渡せば》の原曲は見出されず、したがって出典は明らかにされていなかった。

それでは、メイスンがこの《ルソーの夢》を日本にたずさえてこなかったのであろうか。

メイスンは上記の音楽教科書のほか、さらに多数の教科書を来日前後に、単独または同僚の協力をえて編集しているが、その中には初等中学校(グラマー・スクール)の高学年ならびに中学校(ハイ・スクール)用の《アブライジド・フォース・ミュージック・リーダー》(注1)がある。これはメイスンのほか、J・アイヒベルク、H・E・ホルト、J・B・シャーランドの三人が加わっての編集であるが、ボストンのジン・アンド・ヒース社が一八七八年に刊行したこのリーダーには、讃美歌と二声、三声の世俗曲、それに愛国歌が多数収められている。

その中に《我を導きたまえ、おお、汝偉大なエホバよ(Guide me, O Thou great Jehovah)》なる讃美歌が見出される。(譜例①)これこそ《ルソーの夢》の旋律であり、したがって後に音楽的な説明を加えることになるようなわずかな差異が見られこそすれ、《見渡せば》の旋律の原形を示しているのである。この讃美歌についても、詳しい説明は後章にゆずるが、メイスンがアメリカにあってこうした讃美歌を通じて《ルソーの夢》に親しんでいたことが明らかとなるだろう。そればかりではない。一八七八年といえば明治十一年であり、メイスン来日(明治十三年)の二年前であることから、当然来日に際してこの教科書も携えてきたであろうことが推測されるのである。

(注1)《The Abridged Fourth Reader: Being a Selection of Songs and Concerted Pieces with Accompaniment for the Piano; Especially Adapted for High Schools and the Upper Classes of Grammar Schools; To which is Prefixed a Complete System of Solfeggios and Triades for Practice. By Julius Eichberg, H. E. Holt, J. B. Sharland, Luther W. Mason.

◀図版1

THE ABRIDGED

FOURTH MUSIC READER:

BEING A

Selection of Songs and Concerted Pieces

WITH ACCOMPANIMENT FOR THE PIANO;

ESPECIALLY ADAPTED FOR HIGH SCHOOLS AND THE UPPER CLASSES OF GRAMMAR SCHOOLS;

TO WHICH IS PREFIXED

A COMPLETE SYSTEM OF SOLFEGGIOS AND TRIADS FOR PRACTICE

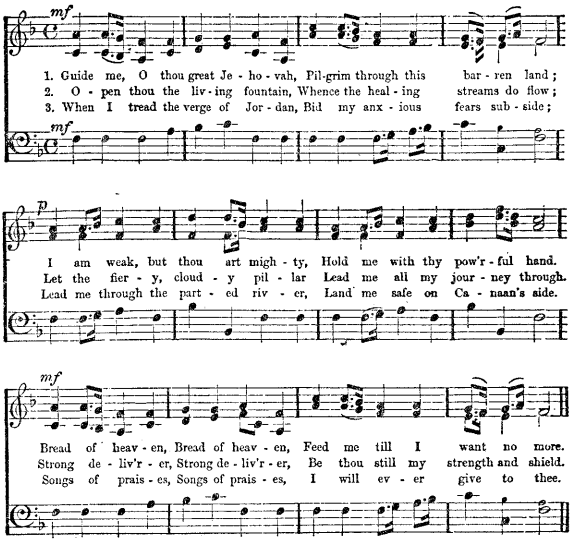
BY

JULIUS EICHBERG, H. E. HOLT,
J. B. SHARLAND, LUTHER W. MASON.

BOSTON.
PUBLISHED BY GINN AND HEATH.
1878.

◀譜例①

GUIDE ME, O THOU GREAT JEHOVAH.



Boston. Published by Ginn and Heath. 1878.（ボストン市立図書館所蔵、図版1）

このようにメイスンがプログラムに記し、かつ以前から親んでいた《ルソーの夢》から、伊沢が〈ルーサウ氏が睡眠中夢に作りたる曲〉ないし〈ルーソウ氏カ睡眠中ニ作リタル曲〉という注釈を導き出したことは、したがってほぼまちがいないといえるだろう。それでは《見渡せば》の戸籍調査をおこなった遠藤宏が、なぜこの曲について〈ルーソウが一七七五年に作曲したもの〉と結論したものであろうか。《明治音楽史考》の著者は、さらに〈米英にも数種の歌詞がつき〉と語っているが、故馬場氏が調査究明に挫折されたこの二点について、つづいて明らかにしてみることにしよう。

遠藤宏（一八九四〔明治二十七年〕――一九六三〔昭和三十八年〕）は東京音楽学校教授や東京大学文学部講師をつとめたほか、有名な南葵音楽文庫にも関係していた。《明治音楽史考》中の〈三、歌曲の戸籍〉執筆にあたっては、当然、外国文献を参照する必要があったが、伊沢修二の《唱歌略説》を再発見し、紹介するという栄誉を担った彼はこの《見渡せば》の〈戸籍調べ〉にどのような手続きを執ったであろうか。私は、彼遠藤宏が東京音楽学校や南葵音楽文庫所蔵の文献類を調べたものと自然に推測するのである。〈歌曲の戸籍〉執筆がおこなわれたと推定できる昭和十年代の後半ならびに昭和二十年代の初頭の時期には、東京音楽学校には《グローヴ音楽辞典》の初版（全四巻一八七九年―八九年）が、また南葵音楽文庫（当時閉館中）には同辞典の第二版、いわゆる〈フラー＝メイトランド版〉（全五巻、一九〇四年―一〇年）が備えられていた。遠藤宏はそのいずれを閲覧したにしても、〈Rousseau's Dream〉なる項目を参照したにちがいない。

この項目には、この《ルソーの夢》が十九世紀初頭に英国でもてはやされた歌（エア）であったこと、この名称で最初に立ち現われたのが、ヨハン・バプティスト・クラーマーの変奏曲（一八一二年）らしいこと、わずかな変化をともなって、四半世紀前に《メリッサ（Melissa）》なるタイトルで見出されることなどが記述されている。(注2)

（注2）現在使われている《グローヴ音楽辞典》第五版（エリック・ブロム編、全二〇巻、一九五四年、〔補巻一九六一年〕）には、この最後の《メリッサ》についての説明は省略されている。

このグローヴの音楽辞典の記述については、のちにもう一度立ち戻ってこなければならないが、ここでは差し当って、遠藤説の由来を尋ねることが主眼なので、その点にしぼってひとまず論を

進めよう。《グローヴ音楽辞典》には、《メリッサ》についての記述はあっても、譜例は挙げられていない。遠藤宏はつづいて探索をどのように続けていったものであろうか。

これも私見によれば、当時ひとり南葵音楽文庫が所蔵していた参考文献で、《メリッサ》について調べたものと考えられるのである。その資料が《大英博物館印刷譜所蔵目録・一四八七年――一八〇〇年(Catalogue of Printed Music published between 1487 and 1800 now in the British Museum.)》(ロンドン、一九一二年)にほかならない。その《メリッサ》の項目を見ると〈歌曲、《スウィート・メリッサ(Sweet Melissa.)》(一七八七年?)を見よ〉とあり、当該の《スウィート・メリッサ》を見ると次のような記述にぶつかる。

〈いとしのメリッサ、美わしの乙女よ! Sweet Melissa, lovely Maiden! メリッサ〔歌曲〕C・ジェイムズ詞。〔ルソーの夢の節に合せて〕ピアノ・フォルテ、ハープ、またはギター用に編曲。J・デイルのために印刷。ロンドン、〔一七八八年?〕二つ折版。G.三七七(一七)〉

この記述でも、《メリッサ》と《ルソーの夢》が関係づけられていることが理解されるだろう。ところで、この《メリッサ》は、同じ所蔵目録のルソーの項目、それも《村の占師》のところでも挙げられているのである。ルソーの《村の占師》は著名な幕間劇であり、種々の印刷譜も刊行されているが、大英博物館のこの所蔵目録にも、そうした総譜のほか、このオペラから抜け出たピースも採り上げられている。

その中に次のようなピースが記録されているのだ。〈〔第八場・パントミム。〕スウィート・メリッサ・ラブリイ・メイドウン! を見よ。〔歌曲〕……〔ルソーの夢の節に合せて〕編曲。〔一七八八年?〕二つ折版。G.三七七(一七)〉

ところが、この個所のすぐ上には、なお、次のようなエントリーがある。〈〔第八場・パントミム。〕キュテラ島の森の茂みで Dans les bosquets de Cythère。新ロマンス。〔パリ、一七七五年?〕八つ折版。G.三六二・e・(一一五)〉(傍点筆者)

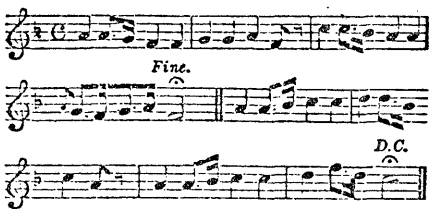
所蔵目録には当然ながら楽譜は掲げられていない。そのため《明治音楽史考》の著者は、《メリッサ》とおなじく〈パントミム〉と指示されたこのルソーの《村の占師》の〈新ロマンス〉《キュテラ島の森の茂みで》を《ルソーの夢》の原曲と考え、その出版推定年代である一七七五年を作曲年と結論したものであろう。

それでは《ルソーの夢》とはいったいなにを意味するのであろうか。この点をくわしく論じてゆくためには、まず《グローヴ音楽辞典》の当該項目を紹介することからはじめなければなるま

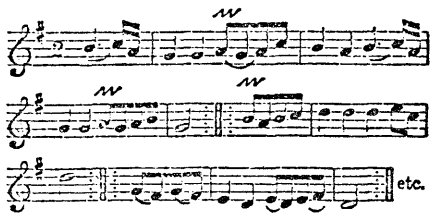
い。ここではおそらく遠藤宏が参照したものと思われる第二版（フラー＝メイトランド編）を訳出してみよう。

「ルソーの夢（Rousseau's Dream）。十九世紀初期に英国で大いに流行した曲。この名ではじめて立ち現われたのは、たぶん〈ピアノ・フォルテのための主題と変奏曲、J・B・クラーマーにより作曲され、デラウェア伯爵夫人に献ず。ロンドン、チャペル〉〔一八一二年〕（譜例②）

しかしこの曲は四半世紀前に〈メリッサ。チャールズ・ジェイムズ殿詞。ピアノ・フォルテ、ハープまたはギター用に編曲。ロンドン、J・デイル、一七八八年〉のタイトルで（まことにわずかな変化を伴なって）見出される。この旋律は《村の占師》の第八場の《パントミム》に出てくるものであり、次のようなかたちである。（譜例③）



▲譜 例 ②



▲譜 例 ③

〔この節が英国に入ってきたのは、うたがいもなく、バーニー博士によって、このオペラが《賢い男》として翻案されたことによってである。はじめて讃美歌に改作されたのはトマス・ウォーカーの《リポン博士の曲集続篇》（一八二五年）においてであると思われるが、この節は《聖歌集》（一八四三年）で〈ルソー〉の名がつけられて出てきたあと、讃美歌の節としてひろく流行するようになったものである。〕〈夢〉というタイトルの由来は明らかでない。」

〔　〕内はW・H・G・フラッドが追加したものであるが、それ以外はグローヴによる記述である。さて、私たちは、この《グローヴ音楽辞典》の記述が正確であり、正鵠を射ているかどうかについてひとつひとつ吟味してみる必要があるだろう。辞典の記述のように、この《ルソーの夢》は十九世紀初頭に、英国でたいへん親しまれたものであったらしいが、それにしては不分明なことも多すぎるように思われるのである。

（つづく）

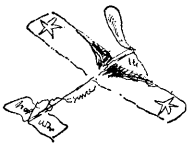
（国立音楽大学）

大人になってゆく子ども

成長発達のリズムと教育（上）

――思春期前まで――

伊藤隆二



はじめに

卵から、ときがたてば幼虫が生まれ出、その幼虫はときがたてば蛹に育ち、そしてその蛹はときがたてば蝶に変態する――。

「ときがたてば」といういいかたは、もちろん自然（じねん）を重んじたものである。自然は人為を超えた、宇宙の大きな動きそのものだといいかえてもよい。

その、いっさいの生きとし生けるものの成長発達のリズムを支配している宇宙の動きは、ちっぽけな人間の頭によってくみたてられた「科学」という名の経験的合理的認識作用では、もとよりつかまえられるものではない。

それは、頭にたよることを止めて、宇宙のうずに身も心もゆだねて、おおらかに生きるという体験のもとで、感知できるものかも知れぬ。

ところで、人間も自然界に小さく位置をしめて生きる生物

「種」である以上、自然の成長発達のリズムの埒外にあることはできない。つまり、人間もときがたてば、一つの「節」をこえて成長発達し、また、ときがたてば、もう一つの「節」をこえて成長発達する、というように、「節」ごとに質的に転換しながら、変化しつづける。そして、いっさいの生きものに寿命があるように、「個」としての人間は、ときがたてば、必ず死ぬ。

教育とは「いかに生きるか」という課題をつねに中心にすえた、成長発達を援助する営みである。が、同時に、教育とは人間が人間らしく死ぬことができるように準備することでもある。人間はいつか必ず死ぬということを知るがゆえに、「いかに生きるか」という重い課題が切迫してくる。

では、人間のばあい、誕生から死ぬまでの約七十五年間に、どのように変化しつづけるのだろうか。そして、人間の「節」は、いつ、どのような形で考えられるものなのだろうか——。

誕生から三歳ごろまでの成長発達を考える

人間の誕生とは、胎児が混沌とした人間関係のなかに、はじめて投げだされるときの一つのできごとである。胎児はときがたてば、呱々の声をあげ、すぐさま、好むと好まざるにかかわらず、社会的存在として、生きていく。

では、いったい赤ん坊はなにかの理由があって、この世にあらわれたのであろうか。否である。赤ん坊はそもそもこの世に生まれることを、自分で望んだのであろうか。否である。

芥川龍之介の有名な『河童』には、お産の場面がユーモラスに描かれている。「お産するとなると、父親は電話でもかけるように母親の生殖器に口をつけ、『おまえはこの世界へ生まれてくるかどうか、よく考えたうえで返事しろ』と、大きな声で尋ねるのです。」

で、もしそのとき胎児が「ぼくは生まれたくありません。だいいち、ぼくのおとうさんの遺伝は精神病だけでもたいへんです。そのうえ、ぼくはカッパ的存在を悪いと信じていますから。」と答えるならば、産婆は母親の体に、胎児を消す注射をするのである。

かりにわれわれの子どもが「人間的存在は悪だ」と知ったとしても、われわれにはもとより胎児を抹殺することは許さ

れていない。

人間の子どもは何の理由も目的もなくこの世に生まれてくるということを、「不如意」と表現することもできる。フランスの作家カミュは「不条理」(absurde)ということばをつかっている。その好みのせんさくはさておき、理由もなく生まれおちた人間の子どもは、特別の障害をうけているばあいは別として、みなときがたてば、くびがすわり、ハイハイし、つかまり立ちし、そしてひとり歩きをはじめる。ものを、はじめは、手全体でにぎるだけであっても、やがて指先でつまみ、さじを巧みに利用して、ものを手に入れることができるようになる。

× ×

「ときがたてば」というのは成熟のことを意味している。ただ注意しなければならぬのは、「成熟」がそのまま自己展開するというふうにとっては間違いである。それは外的要因をうけいれ、かつ変革しながら、その内なるものにとり入れ、それによって内なるものを変革していくという力動的な関係を結ぶことによって、はじめて可能となるからである。

赤ん坊に、あることが可能になるのは、おとなとの実際的な共同的な交わりによっていることは、多言を要しない。ソ連の心理学者レオンチェフは赤ん坊がさじという単純な道具を使えるようになるいきさつを、次のように説明している。

「……母や保母はさじで子どもにものを食べさせる。しばらくしてから母はかれの手にさじをもたせ、かれは自分ひとりで食べようとする。観察が示すように、はじめかれの動作は自然のままのやり方にしたがい、『手で掴んだものは口に入れる』のと同じようなやり方をする。かれの手にあるさじは必要な水平の位置を保たず、その結果、食物はナプキンの上に落ちる……。しかし、もちろん母は傍観してはいない。彼女は子どもを助け、かれの行為に干渉する。このようにして生ずる共同の行為において、子どもはさじを使用する機能が形成されるのである。子どもはいまやさじを人間的な事物として扱う」(傍点は伊藤)。

このことは赤ん坊の歩行開始にもみられる。赤ん坊の歩みはじめの状態をみると、けんめいの努力と歩行をやりとげようとする意欲にみちている。そばでは母親が子どもの歩行を誘い、励まし、赤ん坊はそれに反応し、さらにその歩行という課題を達成しようとする。つまり、歩行は赤ん坊の主体的な課題達成の努力の成果なのである。

子どもが生まれおちたときから社会的存在だというのは、いいかえれば子どもの生存の場が人間的交渉の場であるという意味である。子どもはかかわりあう人間と交渉しつつ成長発達する。

× ×

では、外的要因いかんによっては、子どもの成長発達をはやめることも(ときにはおそくすることも)可能であろうか。たとえば、早期からの言語強化によって子どもの言語発達を促進させるとか、知能教育法の開発によって子どもの知能指数を高めるといったことの可否である。逆に、子どもの生存の場における知的刺激を極端に低減せしめたばあい、子どもの知的発達は著しく遅滞するかという問題とも関連する。

詳細な、かつ信頼できる研究資料が手元にないので、明解な答は出せないが、かりに促進したとしても、あるいは遅滞したとしても、自然の成長発達のリズムという大きな視点からみるかぎり、それはごく小さなできごとにすぎないとみるのが正しいのではあるまいか。

どのような環境におかれても、ふつうに発達していく子どものばあい、「節」はほぼ一致している。たとえば、ほぼ三歳以前の子どもと三歳以後の子どもでは、つぎのようなちがい(質的転換)がみられる以上、三歳ごろを成長発達の一つの「節」に設定することは可能だと考える。

㈠三歳以前の子どもは、かかわりあうおとな(ふつうのばあいは母親)との共生的な生活に満足しているが、ほぼ三歳をすぎるころから、子どもはその共生的な生活と訣別し、同年齢の集団へ参加することを望むようになる。

㈡三歳以前の子どもの活動の範囲はせまく、同一視野内の刺激によってひきおこされる単純なくりかえしに終始していることが多いが、ほぼ三歳をすぎるころから、子どもの活動範囲は急速にひろがり、活動の場面も重畳化してくる。それは子どもの記憶力の発達に裏うちされていることはいうまでもない。

㈢三歳以前の子どものことばは貧弱で、経験の言語による表現もかぎられているが、ほぼ三歳をすぎるころから語彙も増加し、奇抜な、そして豊かな着想による拡散的思考が可能となる。

㈣三歳以前の子どものからだの動きは硬く、ぎごちないが、ほぼ三歳をすぎるころから、柔軟で力動的になるので、鍛えればまたたく間に、種々の運動機能を発揮するようにな

る（自転車のり、スケート、水泳、木登りなどは三歳すぎから、急にじょうずになる）。

× ×

いいかえると、三歳以前の子どもはかかわりあうおとな（母親）の、何かに驚ろいたときの反応の仕方、しぐさ、表情、もののいい方、好き嫌いの感情表出、それにとりまく人びとのかもしだす雰囲気といったものを、そのまま吸収して、人格形成の基盤にすえていくといってもよい。大脳生理学の研究成果からは、三歳ごろまでは大脳皮質の前頭葉連合野以外の領域の脳細胞の髄鞘化が活発で、それはほとんど模倣（という学習）によってなされることが指摘されている。それにたいし、三歳をすぎるころからは、前頭葉連合野の脳細胞の髄鞘化がすすむことから、三歳前後は、人間の成長発達上の一つの臨界期といってもよいのではないか。

三歳前後から十五歳前後までの成長発達を考える

三歳をすぎるころからあらわれる四つの特徴は、十五歳ごろまで、ぶっとおしで、つながっている。まとめると、「仲間を求めること」「活動的になること」「着想が豊かで、拡散的思考が深まっていくこと」「体得的であること」となる。

十五歳という年齢を問題にする理由はいろいろあるが、整理すると、つぎの四つになる。

㈠それまでの自己外へひろがっていた関心の対象が自己内へ方向転換する（内省）。

㈡同時に、外的要因によるコントロールは、自己（セルフ）のコントロールへ切りかわる（自覚）。

㈢理想的自我を想定するようになる（現実の自分との間のギャップを意識するようになる）。

㈣思考様式はおとなの形式的操作に近くなる（いわゆる仮説演繹的思考が十分に可能になる）。

これらの特徴が十五歳以前の子どもにはまだあらわれないが、それがほぼ十五歳以後に急激にあらわれる理由はまだよく知られていない。蛹から蝶に変態するのが自然の現象であるのと同じように、十五歳はそれまでの「子どもっぽさ」から「おとならしさ」へ脱皮する、自然の「節」であると考えられようか。武士時代の「元服」は十五歳の儀式であったが、それはその当時のおとなたちが、感覚的に十五歳をおとなの

時代への入口ととらえたことによるのだろう。

× ×

三歳前後から十五歳前後までの、ほぼ十二年の間に、よく専門家が話題にする〝九歳の壁〟が存在する。それは主として、子どもが時間を意識しているか否かを注目するところから、いわれるのである。

わかりやすい例をあげるならば、子どもが何かを要求したとき、すぐに叶えられないばあい、親はよく今はダメだが、こんど買ってあげようと慰めることがある。その「こんど」とは将来のことである。

将来へ及ぶ時間を体験的に認知している子どもは、親の約束に満足するのだが、そのような認知力のまだついていない子どものばあいは、「こんど」ということばの意味がわからないために、結果として、いま買ってもらえないという事実に激昂するのである。前者は九歳をすぎた子どもであるのにたいし、後者はほぼ九歳以前の子どもである。

つまり、九歳以前の子どもは「いま」という時・空間に生きている（現在進行形の生き方）にすぎず、結果の重大性を意識することは少ない。しかし、九歳をすぎるころから、「いま」という時・空間からぬけ出して、過去――未来という「時間軸」による非現実的なひろがりを認知していく（未来形の生き方）。ここで子どもは事象の順序性、計画性、あるいは因果の構造をつかみ、推理力を発揮していく。

「九歳の壁」を突破できない子どもの思考は即時的で、かつ収斂的であるのにたいし、それを突破した子どもの思考の翼は、「いま」を離れ、われわれをとりまく時・空間を超えて、ときには宇宙へと羽ばたいていく。

十五歳ごろから、子どもは哲学、歴史、宗教、思想といった分野にかぎりない興味をひかれていく。あるいは自然の神秘、宇宙の謎（たとえば、宇宙は有限か無限かといった問題）に果敢に挑戦していく。

この十五歳ごろから、「人間が変る」のである。それは昔も今もかわらない。思春期の到来（主として肉体的成熟についていわれることであるが）は近年、ひじょうに早くなってきたといわれることがあるが、こと精神的成熟の面では、そのような加速現象はみられないのではなかろうか。

成長発達という、みごとな自然のリズムが一世紀や二世紀といった短時間で、急にかわることなどありえないことなのである。

＝つづく＝

（神戸大学）

クリちゃんの動物園散歩（三）

根本　進

二十年前にはじめてヨーロッパ旅行をした時、動物園は西ベルリンで一つだけ見ました。新しいアクアリウムが出来て間もないころだったと思います。その旅行では美術館めぐりが目標のスケジュールだったので、同行の先輩N氏に黙ってここへ連れて行かれた時は、建物のデザインでも見物するために来たのだろうぐらいに思いました。

大きな水槽にいる海の魚にも大して感心せず「日本にもこの位の水族館はありそうだな……」と言うと、「ここをどこだと思ってるんだ。ベルリンが海からどの位離れた所か考えてみろ。日本なら信州の松本の辺りへ太平洋の海の魚を運んでいるんだぞ」とN氏に叱られました。なるほどドイツ人のやる事は大したものだと、それでやっと知ったものでした。

三階には虫の展示セクションがあって、日本の昆虫……それがクモか、アリか、それとも他の何であったか、ハッキリ覚えていないのが残念ですが、要するにそのくらいまだ、生きものの貴重さも展示の面白さもわからず、関心が薄かったことだけは確かの様です。

水族館で思い出すのはデンマークの首都コペンハーゲンの郊外にあるシャロッテンルンドの水族館です。その前から動物園がだんだん面白くなってきて、三度目の外国旅行では動物園散歩が第一目標の様になって方々を廻りました。そして毎日毎日動物園ばかりでは変化が乏しいので、少し様子の違う水族館もないかと土地の人にきいて出かけたのがここでした。

電車で一時間半位、降りてから二〇分位歩いて行きついた所は、ひっそりとした林の中でした。入口を入ると水槽の数

は少なく、お客も私のほかに二、三人だけ。拍子抜けした気持で「まあ、今日はくたびれ休みのつもりで、ここでゆっくりしよう」と思ったら、部屋の真中に一息するのに都合のよい椅子がありました。そこへ腰をかけて見ていると、全く落着いて水槽の中がよく見えます。水辺の草や、水の中に倒れた朽木の様子など、自然のままの様子を美事に再現しています。

美しい海水魚ばかりでなく、一見平凡そうな淡水魚が、ゆっくり見ていると意外に見ごたえがあります。それからアフリカにいるツメガエルだったと思いますが、のっぺりしたひょうきんな顔をした蛙が、深くて暗緑色をした水底から浮き上ってきては、空気を吸って、また潜って行く格好はユーモラスで愉快でした。

もっと驚いたのは、林の木の間をくぐって指し込む、太陽の光線の感じを出した照明が、水の中まで届き、それが全く日光の様に少しずつ動いているのでした。他のお客も三十分ぐらい無言で椅子に腰かけています。つまり、こんな風にここでは急がずにゆっくり味わうように出来ているのでした。

そのころ日本の水族館といえば人出の多い場所にあって、しかもなるべく沢山の人が入るように作ってありました。団体が大急ぎで賑やかにただ素通りすることも少なくありません。水槽の数が沢山あると、見る方はよく見なくても、数を見たことで気がすむそんな所が多かったので、私には、この水族館の静かな印象は新鮮で強烈でした。

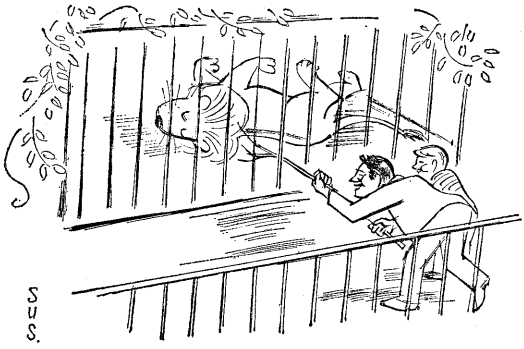
後で、有名なフランクフルト動物園の中にあるエキゾタリウムというのを見ましたが、ここでは皇帝ペンギンのいる所が、上手に氷山と海のムードを出したりしていて、やはりお客が椅子に腰かけてゆっくり出来るようにできていました。確かここだけ夜十時ごろまで開いていると聞きました。

動物園をいくつか見ている中に、珍しい動物の貴重さがわかってきたり、同じ動物を見ても国が違うと、お客の見るムードが違って、なるほどこれがそれぞれのお国ぶりなんだなあと思う様になりました。

イギリス、ドイツ、スイスの動物園は、檻などもよく整備されていて清潔です。特にドイツでは動物についての説明がくわしく書いてあります。一般名、学名、生息分布の地図、そして生態についての解説など、いかにも正確さを誇っているようです。見物客も父親がこれを読んで、地図を指さしながら子どもに教育をしている感じです。そのお父さんの服装

は日曜日でも帽子をちゃんとかぶり、ズボンの折り目も正しい人ばかり。

フランス人（といってもパリだけしか見ていませんが）になると、帽子をかぶる父親は少なくて、道順、番号、説明板などは気にせず、散歩している様です。夫婦が手をつなぎ、四、五歳以上の子どもは両親から離れてブラブラ歩いています。



子どもたちだけ集まって来るのを見て、学校からの見学団体かと思ったりしましたが、それにしては服装はまちまちで、人数も少なく、賑やかなので聞いてみたら、団地、アパートなどでアルバイトの高校生、大学生を休日などに雇って、案内や面倒を見てもらう例が多いそうです。子どもたちもその方が両親と来るより気楽とみえて、いろいろな質問をこのお兄さんに浴びせて困らせたりして愉快そうでした。

スペインでは子煩悩というか、小さい子どもをとても大事にする風習があるのか、公園の一角に母親と赤ちゃんが安全に過せる場所が区切られていたり、動物園でも手をつなぎ、だっこする親が多い気がしました。

面白いのはイタリヤで、いたずら小僧が目立ちます。ローマのボルゲゼ公園の中には、古くなっていますが大きな動物園があります。その動物園で、柵を越えてライオンの檻に近づいて、木の枝で、昼寝中のライオンをつついてからかっている男の子がいました。私は歩きながら遠くからそれを見て「あれ、れ」と思っていると、私の後から父親が大急ぎでそこへ近づいて、息子から小枝を取り上げたと思ったら、自分もやりたくなったらしく、つついていたのにはあきれました。

（漫画家）

★倉橋賞受賞論文★

幼児における空間的な量を表わす言語の発達（その三）

――「大きい」という語の使用とかさの判断との関連――

森　一夫
北川　治
出野　務

本研究の意義

「大きい」「長い」など、様ざまな空間的量を表わす語の中で、本来、物体の体積を表わす大きいという語は、体積の大きさのみならず、高さや長さなど他の量をも表わす基本語である。とくに、言語の未発達な幼児期では、体積以外の次元の量を表現するときにも「大きい」という語が頻繁に使用されることが、これまで何度も指摘されてきた。[注(1)] 前稿ではこの点に関する調査結果を報告していないが、「その一」で行なった語の発達調査では、次のような結果が得られている。たとえば、四歳児では、高低二本の棒が呈示されて、低い方の棒に比べて他方を「高い」と表現できた幼児は一〇％しかいないが、それを「大きい」という語で代用させて表現した幼児は三三％であった。また、「長い」という語の調査では、一二％の幼児が「長い」と表現できたのに対して、それを「大きい」という語で代用した幼児は三三％であった。体

積以外の量でも「大きい」という語で表現する傾向は、年齢的な発達にしたがって、減少していく。本稿では、以上に述べてきたような幼児の「大きい」という語の使い方に視点を向けて、空間的な量を表わす語の獲得と体積判断との関連を検討しようと試みた。

幼児が「大きい」という語を聞いて、どのような次元（たとえば高さや長さ）に基づいて量の判断をするかについては、次のような研究がある。ラムスデンとポティートは五、六歳児に面積の等しい二つの図形を描いた表示板を垂直に立てて呈示して、「どちらがより大きい（bigger）か」と質問したところ、垂直次元（高さ）の大きい方の図形を選択する傾向があることを明らかにしている。[注(2)] マラツォスも同じような実験を行なって、四、五歳児では「大きい（big）」の判断の基準に高さの次元が選ばれることを報告している。[注(3)] これらの実験で使用された"big"という語は、邦語の「大きい」という語と同様、体積のみならず、高さを比較する場合にも日常使用される語である。このことを考えれば、高さを量判断の基準にするというこの実験結果は、幼児が「大きい」という語を「高い」という語の代りに使用していることに関連していると思われる。また、「大きい」という語は長さを比較する場合にも使用される語であるから、高さと同じ一次元的な量である長さについても同じ傾向があると予想されよう。

そこで本稿では、「大きい」という語で物体のかさ[注(4)]のみならず高さや長さをも表わすというように、「大きい」という語を未分化に使用している幼児は、かさをどう判断するかを調べた。すなわち、「大きい」という語を高さや長さにも使用している幼児は、「長い」「高い」といえる幼児に比べて、たとえば、かさが「大きくない」にもかかわらず、それが「長い」対象であれば「大きい」と判断する傾向が強いと思われる。こうした傾向は、言語の未発達な、しかも知覚によって判断が影響されやすい年少児ほど強いと予想されよう。

実験の目的

(1)実際の体積にかかわらず、年少児ほど垂直次元では高い対象、水平次元では長い対象を、かさが大きいと判断する傾向があることを明らかにする。

(2)高さの比較において、「高い」という語を使用できる幼児と、「高い」という語を使用できずに「大きい」と表現する幼児とでは、高さの異なる対象のかさの大小を判断させれば、その傾向に違いがあることを明らかにする。また、同様に「長い」という語を使用できる幼児と、「長い」という語を使用できずに「大きい」

と表現する幼児とでは、長さの異なる対象のかさの大小を判断させれば、その傾向に違いがあることを明らかにする。

実験の方法

(1)被験者

大阪の私立幼稚園を二校選んで、四歳児三一名（平均四歳四か月）、五歳児五六名（平均五歳二か月）、六歳児四五名（平均六歳二か月）合計一三二名を被験者とした。

(2)実験の手順

実験は、幼児と実験者が机をはさんで向かいあって座り、一対一面接法で行なわれた。

まず、全被験者に対して、他の対象と比べて高いもの、または長いものを、「高い」または「長い」という語で表現できるかどうか、また、そのように表現できない幼児が「高い」「長い」という語の代りに「大きい」と表現するかどうかをテストした。これは、「高い」「長い」といえずにそれを「大きい」という語で代用する幼児が、高さや長さの次元を基準としてかさを判断するかどうかを検討するために、まず彼らが高さや長さをどのように表現するかを調べるテストである。次にこのテストの具体的な内容を説明しよう。

〈言語テスト〉

「高い」という語がいえるかどうか調べるために、一二・五九㎝、一一・五九㎝の二本の細い棒を垂直に立てて並置し、低い方を指さしながら「これは低いですね」といった後、長い方を指さして「これは何というのですか」と尋ねた。次に、長いという語がいえるかどうかを調べるために、同じ二本の棒を水平に並べて、同様に質問した。

この言語テストの終了後、次に述べるテスト1、テスト2を行なった。いずれも二物体のかさを比較させる質問で、テスト1は知覚的に高さ（垂直次元）の高い方をかさが大きいと判断する傾向があるかどうか、テスト2は知覚的にみて長さ（水平次元）の長い方をかさが大きいと判断する傾向があるかどうかを調べるために行なわれた。

〈テスト1〉

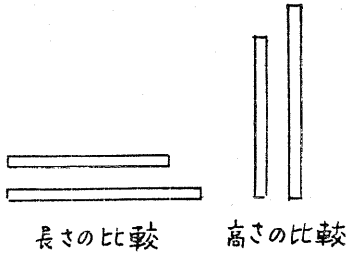


図1　言語テストに用いた呈示物

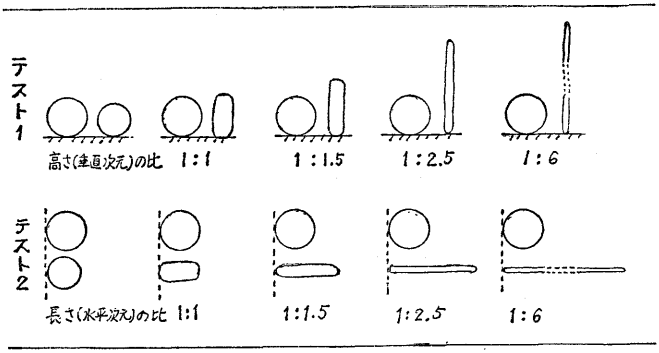


図2　テストに用いた呈示物

油粘土で作った半径二cmの球A（標準刺激）と半径一・六cmの球B（比較刺激）を並べて呈示し、「これはままごとのおもちです」と教示した後、「食べるとおなかがいっぱいになるのはどれですか、指さして下さい」と尋ねた。この質問の後、被験者の目の前で球Bの高さが球Aの一・〇倍、一・五倍、二・五倍、六・〇倍になるように円柱状に変形し（図2参照）、いずれの場合も球Aと並置して、「食べるとおなかがいっぱいになるのはどちらですか、指さして下さい」と尋ねた。

〈テスト2〉

テスト1と同じ呈示物を用い、比較刺激Bの長さを変化させて、テスト1と同じ質問を行なった。変化させた長さの比率もテスト1と同じである（図2参照）。なお、呈示物のかさを比較させ

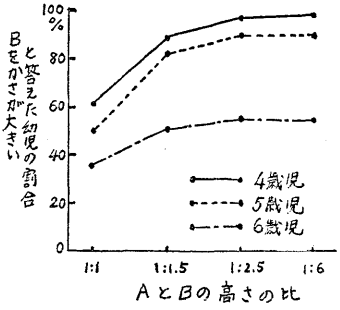


図3　テスト1で比較刺激Bをかさが大きいと答えた幼児の割合

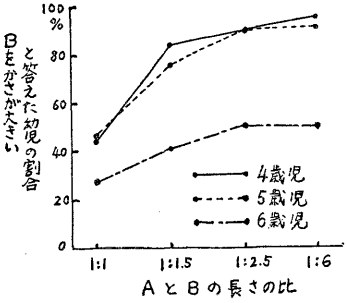


図4　テスト2で比較刺激Bをかさが大きいと答えた幼児の割合

るとき、つねにAとBの一端をそろえ、両物体の上面が同じ高さになるように手で支えて呈示し、被験者には真上から見せた。

結果と考察

テスト1で、標準刺激Aのかさよりも比較刺激Bのかさの方が大きいと判断した幼児の割合（誤反応率）が年齢別に図3に示されている。同様に、テスト2の各質問における誤反応率が図4に示されている。なお、両テストで、比較刺激Bを変形するまえの質問では、Bのかさを大きいと判断（誤反応）した幼児は皆無であった。このことから、「おなかがいっぱいになるのはどちらですか」という質問は、幼児が十分に理解できたものといえる。

まず図3を見れば、四、五歳児では、比較刺激Bを標準刺激Aより高くしたときは、はじめにBのかさが小さいことを認めていたにもかかわらず、Bのかさが大きいと判断しているようである。また、図4に示されているように、比較刺激Bを長くして呈示されたときも、高さを変えた場合とまったく同じ傾向がみられる。そこで比較刺激Bを高くした場合、および長くした場合のそれぞれについて、誤反応した幼児の割合の方が正反応した幼児の割合よりも大きいといえるかどうかを統計的に検定した。四歳児、五歳児ともに高さや長さを変化させた場合に誤反応率と正反応率間に差異（有意差）がみられる（表1参照）。図3、図4で四、五歳児の誤反応率が高いことを対照させてみれば、四、五歳児では実際の体積が小さいにもかかわらず、垂直次元では高い対象、水平次元では長い対象をかさが大きいと判断する傾向が認め

表1　正反応率と誤反応率間の有意差検定（CR）

高さまたは長さの比 A：B		4歳児	5歳児	6歳児
高さ	1：1	1.58	0	3.76
	1：1.5	20.16***	23.14***	0.02
	1：2.5	27.13***	37.79***	0.56
	1：6	31.00***	37.79***	0.56
長さ	1：1	0.29	0.07	8.02**
	1：1.5	14.23***	16.07***	1.09
	1：2.5	20.16***	37.79***	0.02
	1：6	27.13***	37.79***	0.02

P＜0.01，*P＜0.001

られる。

そこで、年齢によってかさを判断する傾向に違いがあるかどうかを調べるために、各年齢間で、図3および図4に示された誤反応率に差異が認められるかどうかを統計的に検定した。高さを変化させた場合はどの比率でも、四歳児と五歳児との間には差異（有意差）は認められなかったが、四歳児と六歳児、五歳児と六歳児の間には有意差が認められた。また長さを変化させた場合についても、高さの場合とまったく同じ傾向が統計的に認められた（いずれも検定の結果は省略）。このことから、六歳児になると、垂直次元では高い対象、水平次元では長い対象をかさが大きいと判断する傾向が、四、五歳児に比べて少なくなっていることがわかる。

表 2　高さ，および長さの表現別にみた誤反応率（%）

	高さの比 A：B	高さの表現 「高い」と表現した幼児	高さの表現 「大きい」と表現した幼児	CR
高さ	1：1	40	59	1.54**
	1：1.5	60	90	2.81**
	1：2.5	68	97	2.96**
	1：6	66	97	3.11**

	長さの比 A：B	長さの表現 「長い」と表現した幼児	長さの表現 「大きい」と表現した幼児	CR
長さ	1：1	40	54	1.27
	1：1.5	58	89	3.03**
	1：2.5	67	93	2.70**
	1：6	69	93	2.49*

* $P<0.05$,　** $P<0.01$

では次に、高さや長さを「大きい」という語で表現した幼児は、垂直次元では高い対象、水平次元では長い対象をかさが大きいと判断する傾向が強いかどうかを検討しよう。

言語テストで、高さを比較する場合に、一方の対象を正しく「高い」と表現した幼児と、「高い」といえずに「大きい」と表現した幼児が、体積が小さいにもかかわらず、テストで高い方の対象を大きいと判断した幼児の割合（誤反応率）が表2に示されている。表2には、「長い」という語の代りに「大きい」という語で表現した幼児のテスト2の誤反応率も示されている。表2では、高さや長さを「大きい」と表現した幼児の方が、「高い」「長い」といえた幼児よりも、その誤反応率は数値的には大きい。実際に両者の誤反応率間に差異が認められるかどうかを検定した。その

結果は表2の右端の欄に示されている。この結果は、「高い」と表現できた幼児よりも、「高い」と表現できずに「大きい」という語で代用した幼児の方が、垂直次元の高い対象のかさを大きいと判断する傾向が強いことを示している。また、「長い」という語の使用と長さの異なる対象のかさの判断についても同じ傾向があることを示している。

以上のように、幼児は物体のかさを比較するとき、高さや長さの次元を「大きさ」の基準として判断する傾向がある。その傾向は、高さや長さを表わす語とかさを表わす語とを区別せずに、それらを「大きい」という語で表現している幼児には特に顕著であることがわかる。

結　論

高さを比較する場合に「高い」といえずに「大きい」と表現する幼児は、「高い」といえる幼児よりも、より高い対象をかさが大きいと判断する傾向が強い。また、同様に、「長い」といえずに「大きい」と表現する幼児は、「長い」といえる幼児よりも、より長い対象をかさが大きいと判断する傾向が強い。

〈付記〉

最後に本研究「その一」～「その三」の実験にご協力いただいたあびこ幼稚園、井高野第二保育園、今福保育園、さくらんぼ保育園、白百合幼稚園、真正幼稚園、墨江幼稚園、高瀬保育所、中津保育園、奈良育英幼稚園、西田辺幼稚園、桃谷幼稚園の各園長、主任をはじめ諸先生方に心から感謝します。　（了）

注(1)　岩淵悦太郎・村石昭三編『幼児の用語』日本放送出版協会　一九七六年

注(2)　Lumsden, E. A. & Poteat, B. W. S., The salience of the vertical dimension in the concept of "bigger" in five and six-year-old. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*. 7, 404-408, 1968.

注(3)　Maratsos, M. P., Decrease in the understanding of the word "big" in preschool children. *Child Development*, 44, 747-752. 1973.

注(4)　幼児においては、成人と同じような三次元の広がりとしての体積概念をもっていると断定できないので、本稿では事物の外観のかさばりを表わす語として「かさ」という語を用いる。

（森＝大阪教育大学、北川＝寝屋川高校、出野＝武庫川女子大学）

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——（二十二）

津守　真

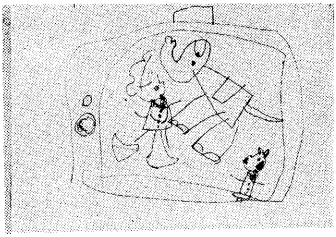
幼稚園にいきたくない

四月から一年の間には、幼稚園にいきたくない子どもに出会うことは、ごく当り前のことである。いきたくない子どもを、毎朝、ひきずるようにしてつれていったり、遠まわりをして面白いものを見ながら幼稚園につれていったことが、私自身、何度あるか数えきれない。また、この一年間にも、幼稚園にいきたがらない子どもの相談に、何回か当面した。幼稚園が子どもにとって、自分らしく生活できる場所になっていれば、幼稚園にいきたくない子どもはずっと減るだろう。しかし、また、どんなによく遊べる幼稚園でも、子どもの生活の中には、おとなに気付きにくいちょっとしたできごとは絶えないし、幼稚園にいきたくない気持を起させる日があって不思議はない。一年の間には、雨の日もあれば、晴れる日もあるのと同様である。

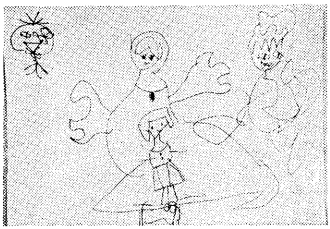
子どもによっては、何週間も、何か月にもわたって、幼稚園にいきたくない日がつづくことがある。それは、それぞれの場合に応じて考えてゆく問題であって、それを解決する公式のようなものはない。四歳児の項を終るにあたり、以前にこのシリーズで記したことのあるYについて考えてみたいと思う。

○

Yは入園式の前日まで、幼稚園を楽しみにして待っていた。入園式の前の晩、ねるとき、ベッドにねかせにいった私の顔を見て、Yはにこにこして言った。「うれしいなー、うれしいなー、あしたはMちゃんと幼稚園にいくんだ。お友だちが、五十人も百人もできた」　入園式の翌日から、幼稚園にいくYの足は重くなった。（それについては、このシリーズの（九）に記した。）幼稚園では、部屋の戸口のところで、じっと立って見ているだけの日がつづく。家に帰ってからは、兄や姉や、その友だちとよく遊ぶ。幼稚園では遊ばないと自分できめていたようである。こうして一か月たった五月十一日に、家でかいた描画に次のようなものがある。（写真1）



◀写真1



◀写真2

トランクのようないれ物の中に、人と動物が向き合っているところが描かれる。右端に小さく女の子が描かれている。トランクには鍵穴がついている。

全体が内部のイメージである。おそろしい動物と向い合っている女の子も自分であり、右下で小さくなって見ているのも自分であると考えられる。幼稚園で、じっと立って見ている子どもの内的世界には、何か得体の知れない生きものが存在し、それと向い合っている自分自身があるのであろう。

同じ日に描かれた描画（写真2）では、女の子は大きな人物の内側に描かれる。明らかに、母親に抱かれている自分自身の姿である。同じ画面に、もうひとつの人物が描かれるが、その目や口は恐ろしく描かれ、手足は不明確で、得体の知れない恐ろしい存在である。女の子を抱く母親の手が、大きく明瞭にかかれているのと対照的である。幼稚園で出会うおとなたちは、Yにとって、

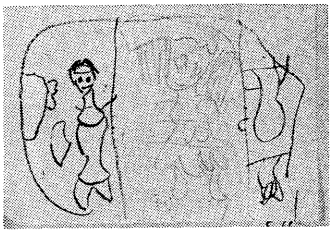
得体の知れない恐ろしい存在として映っているのかもしれない。

それから一週間後の五月十一日には、次の描画が描かれる。

（写真3）

かこみの中が三つの空間に分れている。左端の空間には、人が描かれる。Yは「これ　ちらかったおへやで　おかあさんがおしごとしているの　おもらししたの」と言う。中央の空間の人物については、「女の子がパジャマきて　ねむっているの」と言う。

女の子は、パジャマを着て眠っている。パジャマは、外に出てゆくときの衣服ではない。家の内で、最も内側で、眠るときの衣服である。その衣服は、二本の横線によって縛られている。女の子は、外の世界に出てゆく希望を放棄して、自分自身の内側の世界に入りこむよりほかないと感じているかのようである。



▲写真3

起きて動いていると認識されているのはお母さんであるが、お母さんはちらかった部屋にいる。ちらかった部屋というのは、子ども自身の、困惑した感情を示すものであろう。また、お母さんはおもらしをしている。母親は、普通、おもらしをするものではない。これは、母親によって代表される女性のおとなに対する認識の混乱を示すものではないかと思う。幼稚園で、母親以外のおとなに出会い、母親とは違った反応に遭遇して、子どもの側に、おとなの女性に関する認識の混乱を生じたのではないだろうか。

右端の空間には、何かよく分らないが、物が描かれている。その空間の仕切りには、ドアの把手がつけられている。女の子の眠っている空間のさらに奥には、何かがしまってある空間がある。

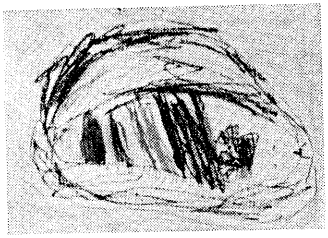
これらのえを描いたころも、家に帰れば、兄姉や母親と遊び、いろいろなことをして遊んでいる。その動いているところだけを見たら、この子どもの内側に、このえに示されるような世界があるのを見てとることは困難かもしれない。子どもが、自分からか

きはじめ、自分で満足のいくように描くえには、そのころに、子ども自身が生きている生活の基調をなすイメージがあらわれる。

この子どもは、幼稚園にいって、自分がどう対処してよいか分らない、おそろしく、得体の知れない存在に出会っている。そして、その心は外に向くのではなく、内に向いている。

Yは、一学期は、ともかくも幼稚園にいった。

夏休みに入ったばかりの七月二〇日、台所で小さな便所虫を見つけた。姉たちとそれをいじっているうちに動かなくなってしまった。それを小さな籠にいれて、Yはだいじにしていた。翌朝、



▲写真4

朝食後、その籠をもってきたが、虫はもうひっくりかえって死んでいた。それをもって、母親をいやがらせたりしていたが、私がハッパをとってきたら、と言うと、ハッパをとってきて、いれてやった。やがて、画用紙を持ってきて、「むし　かく」と言って、かきはじめた。虫のからだをいろいろの色でぬり、ハッパをかき、赤いリボンをつけた。虫は、いく重にも、色でかこまれた中に描かれる(写真4)。いく重にも囲まれた内部の、温かく、安定したイメージがあらわれている。ひとつの虫を見つけても、それは、子どもの内部のイメージによってとらえられる。

夏休みの間に、何枚も、温い内部のイメージを基調として、内と外のテーマのえが描かれる。その多くのものが、描画は簡単な図式的線がきで、ことばが主になっている。次のものは、八枚つづきのえで、次のようなことばがついている。(図1)

(1) 表紙

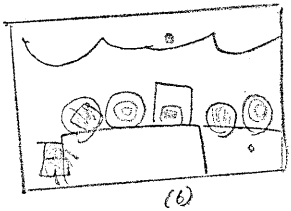
(2) あるとき　おうちがありました。そとには　おはながさいていました。

(3) そこには　おうちがありました。おんなのこが　そこにはすんでいたのでした。

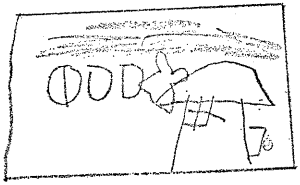
(4) そこには　一けんのおうちがありました。きょうはゆきなので　ゆきだるまをつくりました。

図　2

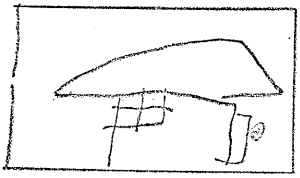
(5)



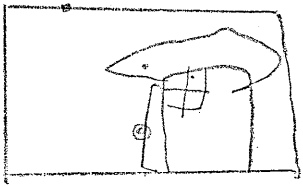
(6)



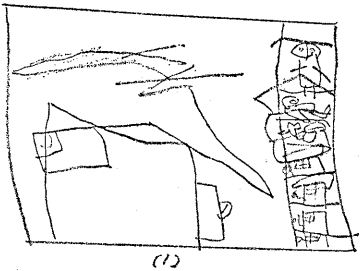
(7)



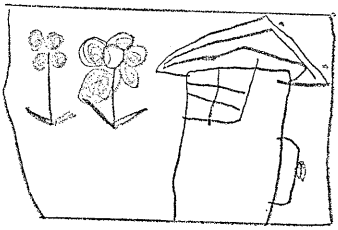
(8)



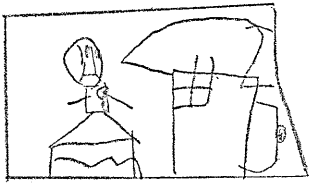
(9)



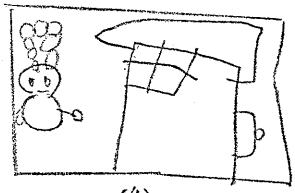
(1)



(2)



(3)



(4)

(5) ここには　かわいいおんなのこがいました。おそとにあそびにいったのです。

(6) きょうは　おんなのこのパーティです　だって　おんなのこのおたんじょうびだから　パーティです。

(7) よるになりました。こどもはかえってきました。みかんづきさまがでました。

(8) あさになりました。こどもが　ようちえんにいきました。

(9) うちのえ

この一連の絵は、うちの絵からはじまり、うちの絵がくり返しあらわれる。どのうちにもドアがついている。それは女の子の住むうちで、女の子は自分である。外には花が咲いており、また、雪だるまをつくる。家の中では女の子のパーティで、ご馳走が並んでいる。家の中はパーティで賑やかであり、外も、はなやかである。夏休みになって、幼稚園から一歩はなれたとき、幼稚園と家と両方が思い出される。夜になって、三日月の出るころには、子どもは家にいる。朝になると幼稚園にゆく。家と幼稚園との間を往復する生活が子どもの心に思い出され、子どもの心もまた、その両者の間を揺れ動いているのだろう。その絵をかいているのは、幼稚園にいく必要のない夏休みのことであるが、その間も、子どもの心はその両方の間を往復して、考えをめぐらしていると言ってよいのではないかと思う。

夏休み中に描かれた絵のシリーズのもうひとつは、次のようなことばを伴ったものである。（図2）

(1) 表紙　うちのえ

(2) おんなのこが　そとであそんでいました。

(3) うぐいすひめがあそんでいました。

(4) このこは　だれもあそんでくれません。

(5) このこは　びょうきなので　びょういんであそんでいます。

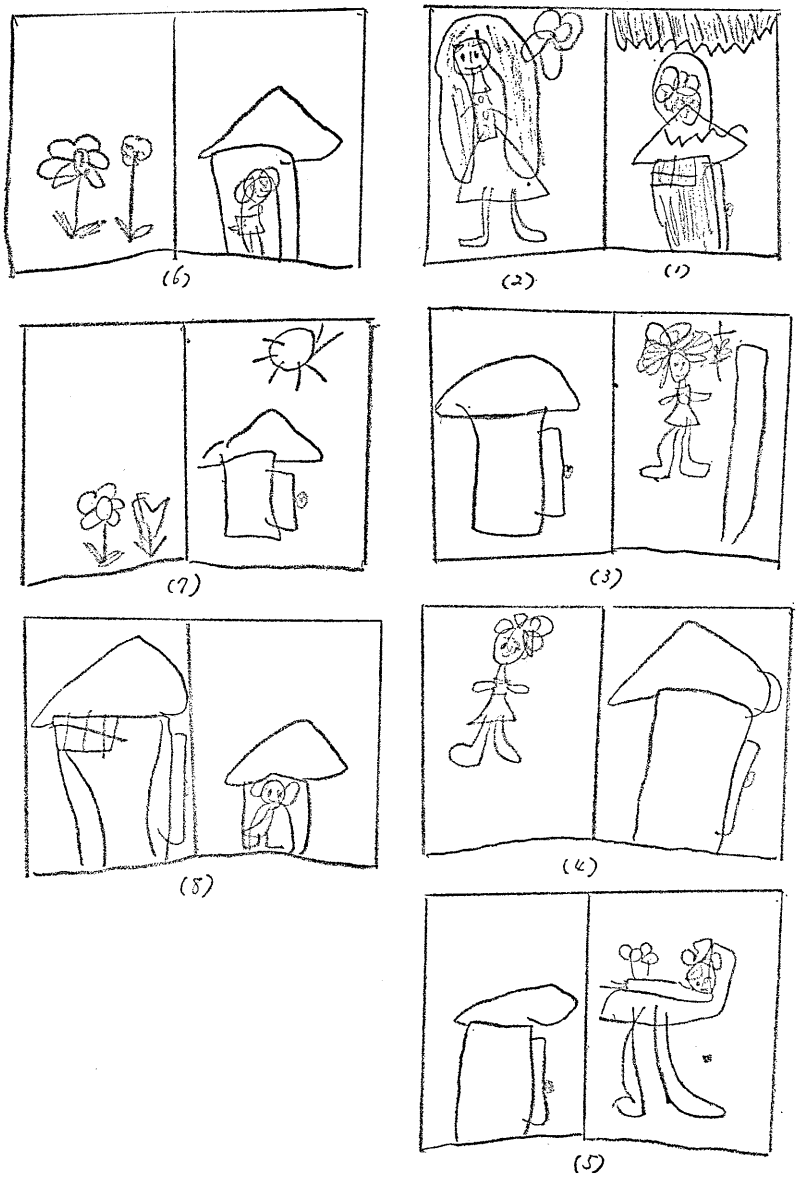
(6) いぬが　おはなをみています。

(7) このこのうちは　まだおきていません。

(8) ここに　ちょっと　いぬがいますが　こわくありません。

これも、内と外のテーマの絵である。女の子とうぐいすひめは、同じスタイルのリボンを頭につけており、同じ人物として描かれている。女の子は、うぐいすひめという素敵な華やかさを持っている。その女の子は家の外にゆく。幼稚園かもしれない。けれども、外ではだれも遊んでくれない。自分自身をおひめさまに

図　2



して描いたこの子どもは、次には、自分自身を病気にする。病気でねているベッドは家の外に描かれている。家の外にいる自分は、元気にとびまわる自分ではない。まだ自分自身を十分に発揮している状態ではない。Yは犬がこわい。道路で犬を見ると、犬を避けて遠くをまわって歩いてゆく。ここでは、犬がお花を見ている。その犬は犬小屋の中に描かれており、外で自由に歩きまわっている犬ではない。花といっしょにあるので、安全だとは思うがやはりこわい。この子のうちはまだ目覚めていない。内側にはいりこんでいるこの子の心は、まだ外に出てゆく準備が十分にできていない。そして外を見ると、犬がいる。こわくないと頭では否定するけれども、やはり、ちょっとこわい。「ちょっと」ということばを付け加えるところに、Yの内と外に動揺する心があらわれているように思う。

夏休みの間に、似たような絵がほかにも描かれるが、気持の上で、内と外との間を動揺しながら、秋の学期を迎える。

十月、十一月には、幼稚園にいきたくない日が多くなる。子どもの心は、幼稚園と家との間を揺れ動きながら、現実には、幼稚園のマイナスの面が強く認識されるのだろう。朝、どうしても幼稚園にいかないと言って、部屋の奥に逃げこむ日もある。ひきずるようにして、つれてゆく状態である。幼稚園にいってしまうと、普通の生活をしているようである。喘息のため、せきが出て、苦しくて、休む日も多くなる。

11月17日

Yは、家に帰ってきて、ふとしたときに言う。「幼稚園てつまんないのよ。うるさくて、わーわーして」

Yには、幼稚園は、うるさくて、わーわーするところと感じられていることがわかる。大勢の子どもがいても、その子どもたちのしていることの意味がとらえられていれば、うるさい騒音とは感じられないであろう。一緒になって遊び、自分もその中に入りこんでいれば、外部の人には騒音と聞えても、子ども自身には、それぞれの動きや声は、ある種の秩序を持つであろう。逆に、整列し、並んで坐っていても、子どもたち自身が、心から参加していなければ、先生の声も、子どもの動きも、秩序のない騒音となるであろう。

12月13日

Yは熱を出した。「ねつで　とくした。ようちえんにいかないですんで」と何度も言う。

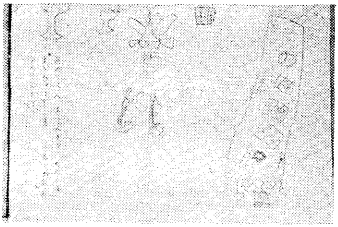
熱を出して寝ていると、兄や姉たちが、お見舞いを言って、カードを作ったり、絵をかいたりして持ってきてくれる。一日中、

にこにこして床の中で遊んでいる。

12月19日

病気の日の朝、気持ちがよくなって、「パラパラおちる、……」と歌をうたいながら、絵をかく(写真5)「スケートぐつはいたおひめさま。びょうきになったあさでね、クリスマスツリー、まどからリスがのぞいてる」と言う。

右端の木は、全体がクリスマスツリーであり、家になっている。家の中にはりすがいて、窓から外をのぞいている。家の外には、うさぎのおひめさまが、スケートぐつをはいて踊っている。



▲写真5

雪が空から降っている。家の中から外をのぞいていた自分が、戸外に出て踊っている絵である。おひめさまを描く線は、軽い曲線で、雪も軽いタッチで描かれている。病気が治りかけたときの快い気分と共に、軽い足どりで外に出てゆく心の動きがよくあらわれている。

三学期になると、幼稚園にいきたくないと言ってぐずる日が少なくなる。そして、四歳児の三学期から、五歳児の一学期にかけて、Yは、ようやく、幼稚園で大声を出して動き、友だちとよく遊ぶようになってくる。描画の面からいうと、内部のイメージをテーマとする描画が、より精細になってくる。そして、その後に、本格的に外出のテーマの描画があらわれるのは、五歳児の後半である。

Yが幼稚園にいきたくなかったとき、Yの心には、自分自身の内部のイメージに浸りたい気持が優勢であったのだと思う。温い家の中で、静かに落着いて、ひとりで、何かを作ったり、ごたごたと物を動かして遊んだりして過すことの方が、大勢の子どもたちの現実の生活の中に出てゆくよりもずっと好ましかったのだと思う。これは心理学的退行ではない。むしろ、人間の心の自然の

動きである。幼児期には、このことはとくに重要で、このような生活が幼児期にはまだ分化していない芸術や科学やさまざまなことの母胎となっているのであると思う。そして、時がくれば、子どもの心は外に向って動き出す。そのときには、他の子どもと一緒に交わって遊ぶことが面白くてたまらなくなるであろう。Yについていうならば、この後、決然として外に向って足を踏み出す時期がある。それは、内部のイメージそのものの中から生み出される外出のイメージによるものであって、外部からの促進によるものではないと思う。この時期のことについては、後に詳述する機会があると思う。

子どもがひとりで自分の世界に浸りたいとき、それは家庭の中でのみ満たされるとは限らない。幼稚園の中で、子どもが安心してひとりになっていられる空間と時間があるならば、子どもはそれをたのしみにして幼稚園にいくかもしれない。幼稚園は常に、こういう時期の子どもが何割かいることを前提にして考えられねばならないと思う。そして、子どもの心のエネルギーが外に向ったとき、幼稚園では、いつでも、それを受けとめてくれる外の世界がある。この両方の生活を可能にする幼稚園だったら、幼稚園にいきたくない子どもは、ずっと減るにちがいない。

親の側から、このことを考えると、子どもが幼稚園にいきたくないときにも、幼稚園につれてゆかねばならないと考えすぎたと反省している。ひきずるようにして無理につれてゆくことはなかったと思う。何日間か外の世界の生活をしたら、一日か二日、ゆっくりと、子どもなりにそのことを考える時間が必要にもなるだろう。熱を出さないでも休む日があってあたりまえであろう。子どもによっては、休む日が多くて、ときどき幼稚園にゆくような時期があっても、幼稚園は、それで十分に意義をもっている。そのような子どもが、後になって登校拒否になるのかといえば、決してそうではない。むしろその逆であると思う。どの子どもにも、子どもの生活のリズムに合わせて、幼稚園を考えてゆくゆとりが、こちらにもほしかったと思う。

（つづく）

一九七九年を迎えて、本誌の復刻刊行を祝う

津守　真

一九七九年の年頭にあたり、本誌の創刊号から二十巻復刻刊行の案内を掲載できることは、本誌にとって、記念すべきことであると思う。

本誌が、最初、「婦人と子ども」と題して創刊されたのは明治三十四年で、一九〇一年に当る。この雑誌は二十世紀と共に歩み続けてきたことになる。二十世紀の初めは、幼児教育界にとっても大きな転換の時期で、米国では、フレーベル主義の幼稚園が批判されて、丁度抬頭してきた科学的児童研究の支援のもとに、新教育が進められつつある時であった。本誌の創刊は、この新しい幼児教育の動きと連関するものであった。本誌の最初の編集者である東基吉が後に記しているところによると、お隣りの高等師範学校では、新しい教育主義や教授方法などを盛んに機関雑誌に発表したり、高島平三郎氏が雑誌「児童研究」を出したりしていた。それで、東基吉が附属幼稚園の批評係となって着任して間もなく、当時、女高師で毎月例会を開いていた保育研究会であるフレーベル会から、保育専門の雑誌として「婦人と子ども」を発刊することとなったのであるという。

その創刊号からの頁を探ってゆくと、幼稚園の新教育が次第に進められてゆく様子がよく分って面白い。第十二巻（明治四十五年）より、倉橋惣三が編集者となってからは、わが国の幼稚園の新しい時代が開かれてゆく有様を、目の前に見るような観がある。

明治期の「婦人と子ども」誌には、子どものためのおはなし、巌谷小波の童話や翻訳童話などが毎号掲載され、また、子どもの遊びなどが紹介されて、家庭文化、風俗などの観点からも興味深いものがいろいろある。私も、今回、復刻刊行にあたり、久しぶりで、あらためて目を通す機会があり、新たな発見が数々あって、幼児教育のスピリットになまにふれた喜びを感ずることが屢々であった。その中のいくつかを断片的であるが記してみたい。

創刊号の表紙は、荒木十畝（ジッポ）によって描かれている模様図案である。なでしこの花に、ははその葉が配してある。「母蘇に撫子は、母と児に通ぜしめたるなり」と説明が記してある。荒木十畝は、当時、東京女高師の教授となったばかりの少壮の日本画家であった。明治三十七年に

は、米国セントルイス市にて開催された万国博覧会に「秋汀群鴨」を出品して、銀牌賞を得られた。その後、多くの名作を画かれ、帝国美術員会員として活躍された。晩年に『東洋画論』という著書がある。その中に、たとえば松を画く場合（私共の大学の会議室に、荒木十畝の松の図がかけられている。）あらゆる松を研究してそれぞれの松の形と生活を諒解しておかねばならぬことを説く。野辺の稚松、懸崖松、海浜松それぞれに異なる生活の正直なありのままの姿の告白であり、自然は言葉なくして形を以て告げると言う。一本の松の幹を画くにも、これだけの根底のあることを知らされて心を動かされた。幼児教育の研究というのも、これに共通したことがある。この創刊号の表紙は、当時は地味すぎて評判がよくなかったらしいが、幼児教育研究誌の第一頁にふさわしい画家の作品であると思う。

倉橋惣三が編集者となって間もない十二巻四号には、スタンレー・ホール氏の「幼稚園の教育」の紹介がある。「幼稚園は子供に対する新たな世界であります。一度は人工的であった幼稚園は、今漸くにして自然のままな原始的生命を復活して来たのであります。「吾々はも早や、牧歌を歌う詩人たる要はありません。……温室も芝生も、運動場も木蔭も、小川も池も、皆その中（幼稚園）に備っています」と述べて、幼稚園は子どもを室内から解放して、戸外の自然の中で遊ばせることの必要を論ずる。「新たなる幼稚園の機運は、この旧套を破って、真美なる大自然の心と合致するものでなければなりません。」こうして幼稚園の新教育の幕が開かれる。

「幼児の教育」誌の復刻は、それからほぼ八十年を経た現代に、幼児教育のスピリットを伝えてくれる。年頭にあたり、関係者の御尽力により、本誌の復刻刊行の大業がなされることを心から祝うものである。

幼児の教育　第七十八巻第一号

一月号　©　定価二五〇円

昭和五十三年十二月二十五日　印刷
昭和五十四年　一月　一日　発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　津　守　真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九―一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら，おとりかえいたします。

主催：日本幼稚園協会・みどり会

第8回幼児教育海外事情視察旅行のおしらせ

〔春の南ヨーロッパを訪ねて 10日間〕

1979年 3月26日(月)～4月 4日(水)　¥255,000

陽光のアテネ・エーゲ海，古代の栄光を今に残すローマ，ヨーロッパの華パリを10日間で訪ねる魅惑の旅です。費用は若い皆様が参加しやすいように特別に配慮いたしております。皆様おさそいあわせのうえご参加ください。

企　画

お茶の水女子大学教授
同附属幼稚園長
中　村　英　勝

みどり会会長
山　村　き　よ

日　程

東京～アテネ（3泊）・エーゲ海クルーズ～ローマ（2泊）～パリ（2泊）～東京

視　察

アテネとローマで幼児教育施設の視察を予定しております。

募集人員

40名（先着順に受付けさせて頂きます。）

旅行費用

¥255,000（ローンによるお支払いもできます）

●旅行経費に含まれるもの

①航空運賃　②一級クラスホテルツインルーム　③全朝食、6回の昼食、2回の夕食、④視察経費（通訳、バス代）⑤各都市の市内観光（ガイドバス代）⑥空港税　⑦20kgまでの手荷物運搬料金　⑧団体行動中のチップサービス料　⑨ツアーエスコート経費 等

日　程

日次	月日曜	地名	現地時間	交通機関	予定	食事
1	3月26日(月)	東京（成田）発	午後	航空機	南廻り （機中泊）	機中
2	3月27日(火)	アテネ着	早朝	チャーターバス	着後：ホテルで休息 午前：市内観光 アクロポリス、コンスティチューション広場、国立考古学博物館等 午後：自由行動 （アテネ泊）	朝：ホテル 昼：レストラン 夕：ホテル
3	3月28日(水)	アテネ			幼児教育施設視察 （アテネ泊）	朝：ホテル 昼：レストラン 夕：—
4	3月29日(木)	アテネ ↓ ピレウス ↓ エーゲ海クルーズ ↓ ピレウス ↓ アテネ		バス クルーズ客船 バス	終日：エーゲ海クルーズ イドラ島、ポロス島　エギナ島観光 （アテネ泊）	朝：ホテル 昼：船中 夕：—
5	3月30日(金)	アテネ発 ローマ着	午前中	航空機	着後：幼児教育施設視察 （ローマ泊）	朝：ホテル 昼：レストラン 夕：ホテル
6	3月31日(土)	ローマ		チャーターバス	午前：市内観光 サンピエトロ大寺院、スペイン階段 フォロロマーノ、トレビの泉等 午後：自由行動 （ローマ泊）	朝：ホテル 昼：レストラン 夕：—
7	4月1日(日)	ローマ発 パリ着	午前中	航空機 チャーターバス	着後：市内観光 モンマルトルの丘、ノートルダム寺院、シャンゼリゼ、凱旋門、エッフェル塔等 夕刻：幼児教育セミナー （パリ泊）	朝：ホテル 昼：レストラン 夕：—
8	4月2日(月)	パリ			終日：自由行動 （パリ泊）	朝：ホテル 昼：— 夕：—
9	4月3日(火)	パリ発	午前中	航空機	（機中泊）	朝：ホテル 機中
10	4月4日(水)	東京（成田）着	夜		着後：解散	機中

（注）発着時間、交通機関等は変更になることがございます。

●お問い合せ お申込み，詳細なパンフレットは　はがき，電話にて山村宛又は 交通公社宛ご連絡願います。

みどり会・会長　山　村　き　よ　宅
〒271 千葉県松戸市稔台 828 －12　電話（0473）68－3140

又は取扱い旅行代理店

日本交通公社 国内海外 団体旅行新宿支店（運輸大臣登録一般旅行業64号）
〒160 東京都新宿区西新宿 1－18－8　スカイビル内
電話（03）346－0170　担当：冨田，飯島

JATA

この企画は、特定組織の会員旅行用の企画ですので、一般募集ではありません。

たのしい思い出をこめて―

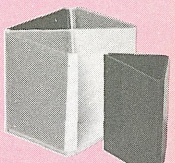
フレーベル館の卒園記念品

新製品がふえました

地球儀
1,200円

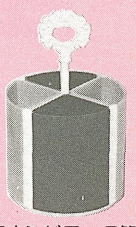
幼児用スリッパ
450円

レッスンバッグ
1,000円



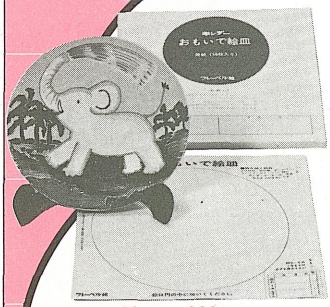
スクウェアラック筆立
300円

学習図表
350円



ラウンドラック筆立
350円

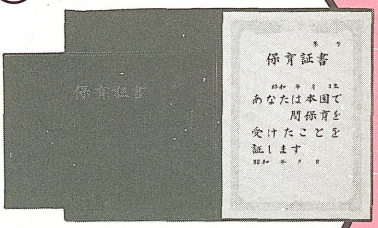
記念制作にどうぞ



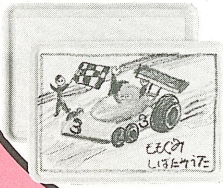
おもいで絵皿　660円
絵皿用紙50枚１組　170円

タオルかけ　200円

証書を美しく保存する

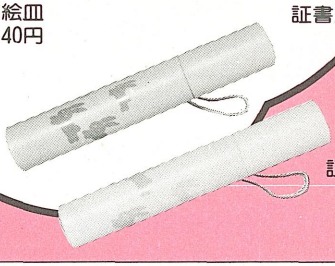


証書用ファイル
250円



がくトレー皿　180円

花絵皿
40円



証書用筒
120円

この他にも
多数とりそろ
えておりますので
ご用命ください。

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・または本社営業課☎(03)292－7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館